大正九年十一月一日發行　大正九年十月五日印刷納本

修監　馬生島友　村藤崎島

Z32-B88

金の船

十一月号

第弐卷 第十一号

秋が來ました。お庭には美しい菊の花が咲いてゐます。空には雁が、澤山々々並んで飛んでゐます。太郎さんと花子さんは、可愛い聲を揃へて『雁々渡れ、棹になれ、鍵になれ』と歌ひます。

やがて日が暮れると、太郎さんは日本の子供と云ふ繪雜誌を、花子さんはナカヨシを出して面白いお伽噺を讀んだり、綺麗な繪を見て、寢るまで遊びます。日本の子供は一冊送料共二十五錢五厘半年分送料共壹圓五十錢、ナカヨシは壹冊送料共十五錢五厘半年分送料共九十錢を東京九段キンノツノ社へ拂込んでおけば、毎月雜誌が出るたびごとに、送つて參ります、振替口座は東京參〇五七貳番です。

鈴木善太郎童話集

初山滋畫

東京牛込區神樂坂通
振替東京四四六八七

文泉堂發行

最新刊

迷ひ子の家鴨

定價一圓九十錢
郵稅十二錢

見て面白い本、讀んで面白い本——

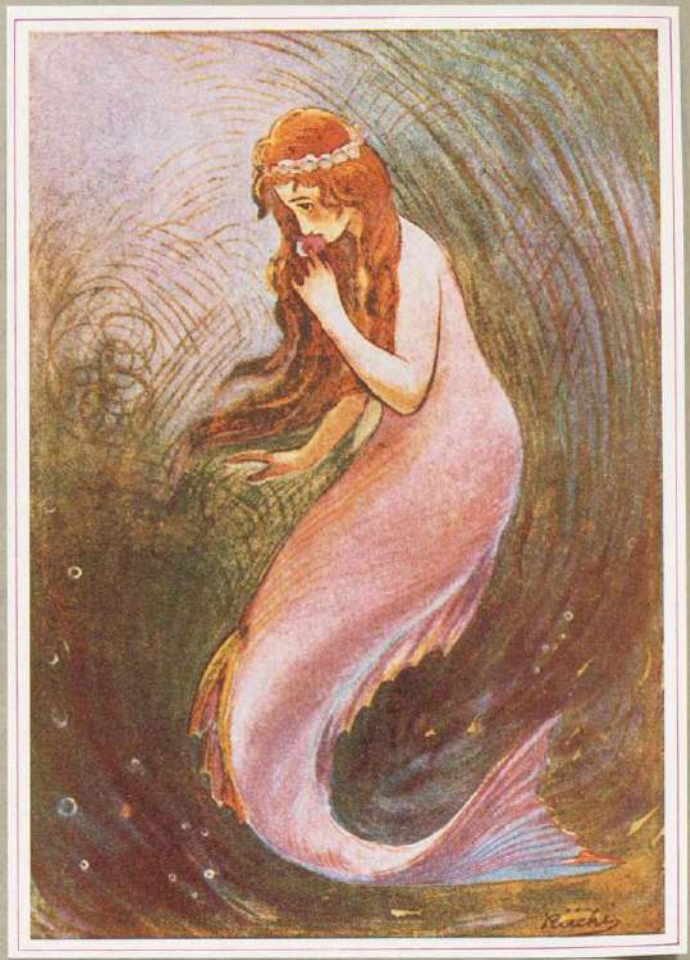
迷ひ子の家鴨はどこへ行つたでせう
　かわいさうな家鴨は
何をあなたに語るでせう？
　あなたのしあわせを！
あなたのよろこびを！

最も新しい、最も自由な形式で書かれた童話「迷ひ子の家鴨」「新しい靴」「最初の時計」等十五篇を收む、いづれも面白く、暗示に富み、空想に富む世界を描いてゐる。著者と共に「愛らしい坊つちやん、鏡ちやん方を持つてゐらつしやるおとうさん、おかあさん方に」このご本をおすすめする、加ふるに初山滋氏の十餘枚の挿畫は美しい裝幀と相俟つてこの集にふさはしい。

（女學世界）

目次

木の實（長篇　行脚劇）……岡本歸一
きりぐす（曲譜）……山田耕作
機織蟲（童話）……野口雨情
山家の話（童話）……島崎藤村
人魚ものがたり（童話）……西條八十
進軍の歌（童話）……西條八十
山六爺さん（長篇童話）……沖野岩三郎
支那伊蘇普物語（童話）……楠山正雄
水瓶の買物（童話）……鈴木善太郎
誰が一番利巧でしよ（繪ばなし）……岡本歸一
大勇士イリヤア（童話）……馬場孤蝶
きりぐす（童話）……三木露風
屋島の戰（歴史童話）……窪田空穗
みちぐさをするな（ジンチ繪）……船橋重一
王様の退窟（童話）……久米正雄
諸國傳說童話（傳說）……藤澤衞彥
母さん里（童話）……野口雨情
はたおり（推薦）……都築益世
むかひの桐の木（推薦）……一瀨三郎
ウチノトコ（自由畫）……山本鼎選
猫と犬（童話）……野口雨情選
はた（幼年詩）……若山牧水選
にはとり（綴方）……編輯部選
通信……
口繪（原色版）挿畫（凸版）……岡本歸一



わかれ

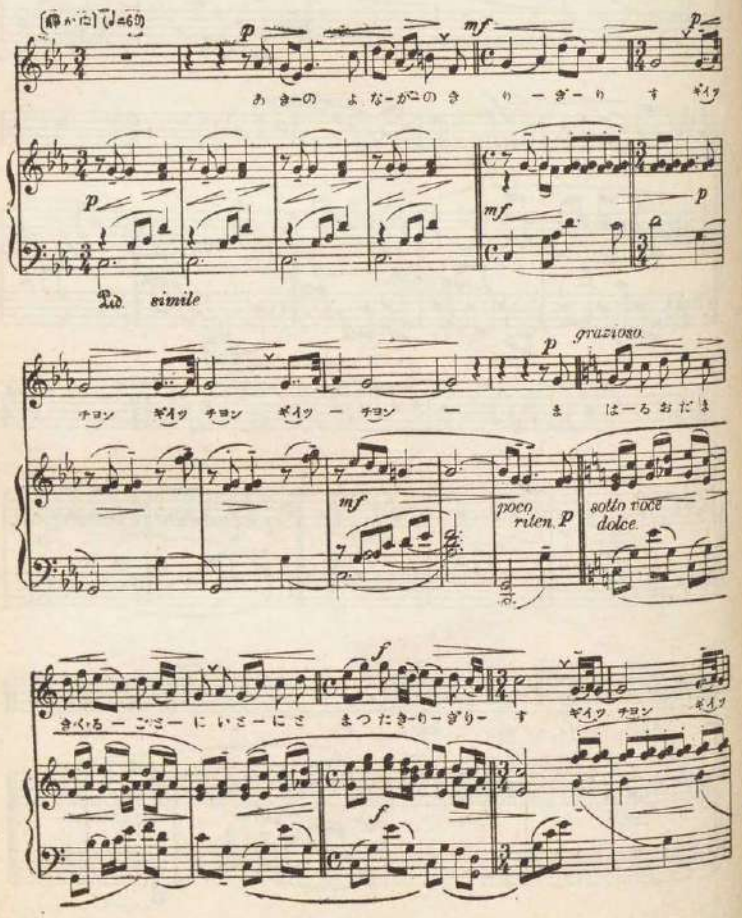
仕方なく〳〵王女は口をあいて、可愛い舌をさし出しますと、老婆は容捨もなく鋏でチョキンと切り取ッてしまひました。

一言ももの云ふ事が出來なくなつた哀れな王女は、たゞ人間になれると云ふことの嬉しさに、大切な藥の罐を片手に、もと來た路をイソイソとお城まで歸つて來ました。見るともはやお城の窓には燈影がひとつも見えず、シンとして寢靜つてゐますので、とりあへず庭に並んでゐる姉さんたちの花壇から一つ〳〵花を毟りとり、それにやさしい接吻をして、それとなく別れをつげ、碧い水の面へと泳いでのぼつて行きました。

（西條八十氏「人魚ものがたり」より）

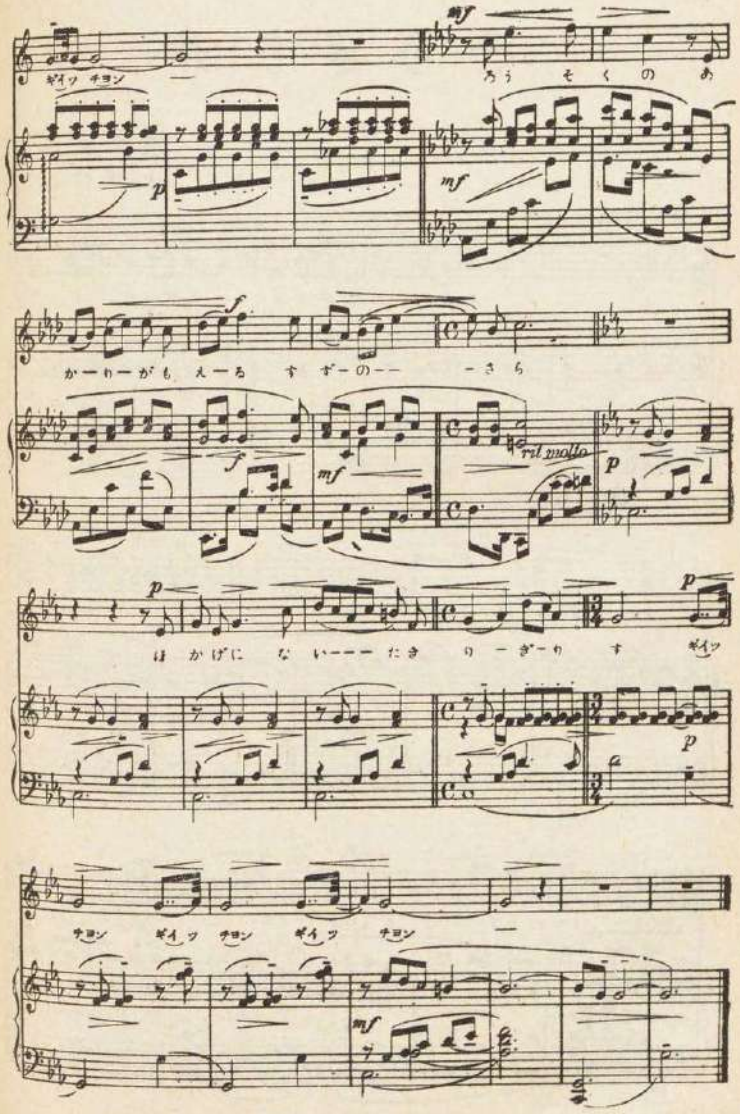
きりぎりす

三木露風詩
山田耕作曲



金の船

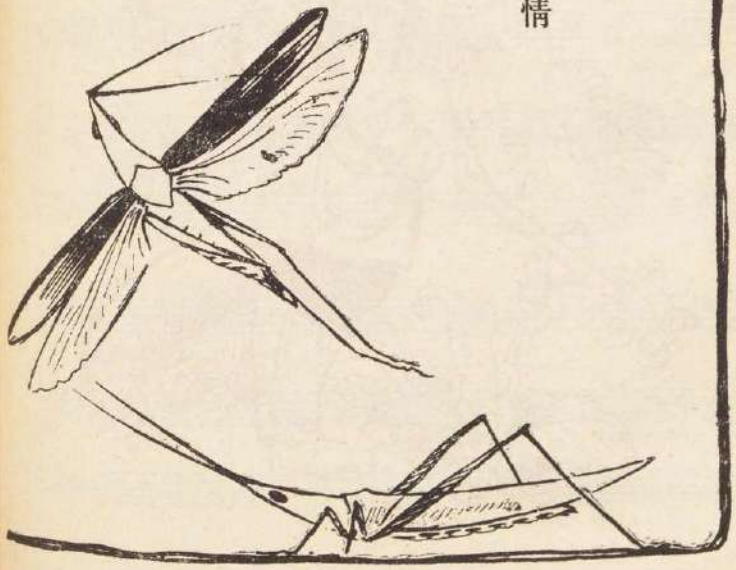
十一月号


ギイッ チョン
ろう そくの あ
かーりーがも えーる すずーの-- -さら
rit molto
ほかげに ない--- たき り ーぎーり す
ギイッ
チョン ギイッ チョン ギイッ チョン

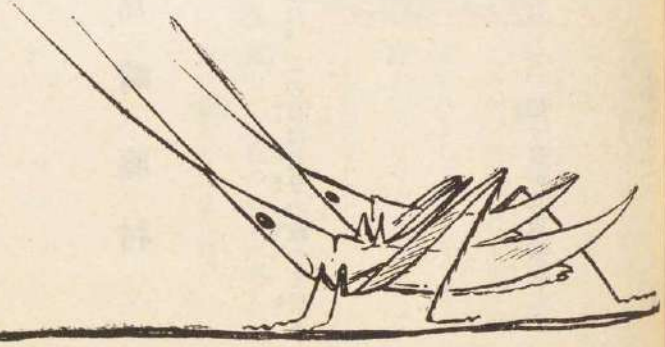
機織蟲

野口雨情

機織蟲は
一機
織つた
小笹に風は
搖れ搖れ



吹いた
田舍は
涼し
凌霄花
機織蟲と
一緒に
遊ぼ



山家の話

島崎藤村

一　屋根の石と水車

屋根の石は、村はづれにある水車小屋の板屋根の上の石でした。この石は自分の載つて居る板屋根の上から、毎日々々水車の廻るのを眺めて居ました。

『お前さんは毎日動いて居ますね。』

と石が言ひましたら、

『さういふお前さんは又、毎日坐つたきりですね。』

と水車が答へました。この水車は物を言ふにも、ぢつとして居ないで、廻りながら返事をして居ました。

風や雪で水車小屋の埋まつてしまひさうな日が來ました。

石は毎日坐つて居るところか、どうかすると風に吹き飛ばされて、板屋根の上からいまにも

轉がり落ちさうに成りました。

水車は毎日動いて居るところか、吹きつける雪に埋められまして、まるで車の廻らなくなつてしまつたことも有りました。

この恐ろしい目に逢つた後で、屋根の石と水車とが復た顔を合せました。

石はもう水車に向つて、

『お前さんは毎日動いて居ますね。』

とは言はなくなりました。水車も、もう屋根の石に向つて、

『お前さんは毎日坐つたきりですね。』

とは言はなくなりました。

二　生徒さん、今日は

村の學校の生徒が石垣の間の細い道を歸つて來ますと、こちらの石垣から向ふの石垣の方へ通りぬけようとする鼠がありました。

丁度。

村では惡戯をした鼠の噂が傳はつて居る頃でした。

いかにそゝッかしい山家の鼠でも、そこに寢て居る女の人の鼻を間違へて、お芋かなんかのやうに食べようとしたなんて、

そんなことはめつたに聞かない惡戯ですから。

學校の生徒に逢つた鼠は賢い鼠でした。

他所の鼠の惡戯から、自分までその仕返しをされては堪らないと思ひましたから、先づ自分の鼻を大事さうにおさへて居まして、それから斯う挨拶しました。

『生徒さん、今日は。』

三　狐の身上話

お稲荷さまは五穀の神を祀つたものですとか。五穀とは何と何でせう。米に、麥に、粟に、黍に、それから豆です。粟は粟餅の粟、黍、皆さんのお馴染な桃太郎が腰にさげて居る黍團子の黍です。

わたしのお家の裏にも、斯のお百姓の神さまが祀つてありました。赤い鳥居の奥にある小さな社がそれです。

二月初午の日には、お家の爺やが大きな太鼓を持出して、その社の側の櫻の木の枝に掛けま

すと、そこへ近所の子供が集まりました。

わたしの幼少な時分にもその太鼓を叩くのを樂みにしたものです。

皆さんはあの繪馬を知つて居ますか。馬の繪をかいた小さな額が諸方の社に掛けてあるのを知つて居ますか。あの額の中には『奉納』といふ文字と、それを進げた人の生れた年なぞが書いてあるのに氣がつきましたか。わたしのお家の裏に祀つてあるお稲荷さまの社にも、あの繪馬がいくつも掛つて居ました。それから、白い狐の姿をあらはした置物も置いてありました。

その白狐はあたりまへの狐でなくて、寶珠の玉を口にくはへて居ました。

『お前さんがお稲荷さまですか。』

と父さんがその狐にきいて見ました。さうしましたら、白狐の答へるには、

『どうしまして、私はお稲荷さまの使ひですよ。この社の

番人ですよ。私もこれで若い時分には隨分いたづらな狐でして、諸方の畠を荒しました。一體、私の幼少な自分には、ごく弱かつたものですから、この白狐はこれでも育つかしら、と皆に言はれたくらゐださうです。その私を可哀さうに思つて、親狐は私の言ふなりに育てゝ呉れましたとか。私は他の言ふことなぞを聞かないで、自分のしたい事をしました。鷄が食べたければ、鷄を盜んで來ました。そんな眞似をして、もう我儘一ぱいに振舞つて居りますうちに、どん〳〵私は獨りぼつちに成つてしまひました。誰も私とは交際はなくなりました。私の眼が覺める時分には、誰も私の言ふことを本當にして呉れるものはありませんでした。御覽の通り、私は今、お稲荷さまの社の番人をして居ます。私のやうな狐でも生れ變つたやうになれば、斯うして社の番人をさせて頂けるのです。私がもう若い時分のやうな惡戯な狐でない證據には、この私の口を御覽になつても分ります。私がお稲荷さまのお使ひをして歩く度に、この口にくはへて居る寶珠の玉が光ります。』

とさう申しました。

人魚ものがたり（中篇）

西條八十

一

この日からといふものは、王女は以前よりずつとずつと陰氣になり、絶えず物思ひに沈んでは小さな嘆息ばかりつくやうになつてしまひました。姉の王女たちは心配して、はじめて海の上へ行つて一體何を見て來たのかと頻りに訊ねました。が、王女は默つたなり一言も答へませんでした。

毎晩毎朝王女は、自分が皇子を殘してきたあの砂濱の近くまで泳いで行つては、せめて遠くから一目でもその姿が眺めたいと念じましたが、つよい北風が綠の森のなかのあの皇子を攫ざ入れた白

い家をちぎれまとばかり吹き搖がす朝に、また夜に沈む日がむかし皇子が横はつたことのある渚の白砂をひとつ〳〵紅寶石のやうに染める夕があつても、つひぞ皇子の姿は一度もそこらあたりに見あたりませんでした。

思ひにあまつた王女は或る日思ひ切つて姉さんたちにこの事をうち明けました。すると王女たちの中には皇子のゐる御殿を知つてゐたのがあつて、皆で王女をその傍までつれて行つてくれました。

それは輝く黃ろい石で築いた巨きな立派な御殿でした。長い大理石の階段が波打際から奥殿まで續いてゐました。人魚の王女はそれから毎日毎晩この御殿の近くを泳ぎまはつて、花園のほとりの噴水のかげで本を讀んでゐる皇子の横顏や、快走艇に乘つて月夜の海を漕ぎまはる皇子のあとを何處までも〳〵見えがくれに追つたりしてはかなく心を慰めてゐました。併し皇子の方ではそんなことは夢にも知りませんでした。いつも自分はひとりで遊んでゐるのだとばつかり想つてゐました。時折波間に、人魚の白い綺麗な面差をチラと認めることがあつても、それは海の泡沫か、または白鳥の翼ぐらゐにしか考へませんでした。

かうしてゐるうちに、人魚の王女が人間の世界を慕ふ心は日に增しはげしくなつて來ました。どうかしてあの樂しさうな人間の仲間入りをして一緒に歩いたり遊んだりしたいものだと、そればかり思ふやうになりました。

そこで王女は或日祖母樣に、

『どうしたらわたしたちは人間のお友だちになれるの？』と訊ねました。すると祖母樣の云はれるには、

『それは出來ません。人間とわたしたち人魚とは何もかもまるで違つてゐるのです。わたしたちの壽命が三百年ときまつてゐるのに引きかへ、人間の壽命はその半分もありません。けれど人間にはいつまでも生き殘る靈魂といふものがあつて、たとひ人間の肉體が死んでも、その靈魂だけは清らかな空氣のなかを輕々と天へのぼつて行つて、あの輝かしい星の群のなかに止まり、そこに永久に生きてゐるのです。悲しいことにはわたしたちにはさうした靈魂がありません。だからわたしたちが死ぬと、そこにはたゞ白い寂しい水の泡沫が殘るだけなのです。』

『どうかしてわたしたちにもその靈魂が持てないでせうか？　わたし、壽命なんかみんなうつ棄つてもいゝから、人間のゆくその星の世界へ行つてみたい。』

人魚の王女は泣きさうな顏をしてかう云ひました。祖母樣はやさしく、

『それは出來ないことです。さうするには誰か人間の中でおまへを生みのお父さんよりお母さんよりも強く愛する人がゐて、おまへを生涯のお嫁さんにし、いつまでも大切にすると坊さんの前で誓ひを立てゝ、呉れなくてはならない。さうすればその人の靈魂の片われがおまへの身體のなかへ浸み入つてきて、おまへは人間の仲間入りも出來、死んでから星の世界へものぼれるやうになります。けれどそんな幸福は願つても得られないことだ。おまへの腰から下についてゐる尾鰭、それはこの國でこそ美しい姿のなかに數へられるが、人間の世界へ行けば不具者で、人間にはそれとは違つた足といふものが二本ちやんと著いてゐるのです。人間と生れるのも、人魚と生れるのも、みんなそれ〴〵のきまつた運命で、人間には人間の樂しみがあると同じく、わたしたちには亦わたしたちの樂しみがあるのだから、決してそんな身分にはづれた望みは起さぬがよい。』

と、呉々も諭されました。

人魚の王女はこれを聽いて、今更のやうに自分の身體についた尾鰭を悲しさうな眼でヂッと眺めてゐましたが、この時すぐに心のうちには或る怖ろしい決心が湧いてゐました。

二

ある晩、海の王樣の御殿には賑やかな舞蹈會がありました。紅、白、綠、紫、さま〴〵の色の貝

のなかに點された明るい燈火の下で、姉の王女たちや一同の人魚たちがさかんに踊り狂つてゐる眞最中に、末の王女はソッと庭口から拔けだし、氣味のわるい大渦卷の下に住んでゐる魔法使のお婆さんのところへ訪ねて行きました。

草も生えない灰色の砂原を越し、生溫いじめじめした膝まで潜る沼地を涉つた淋しい森のなかに、そのお婆さんは海で死んだ人間の骨で家をたて、太つた黃白痴らな海蛇にとりまかれて、住んでゐました。さま〳〵な怖いおそろしい目を忍んで遙々そこまで訪ねてきた王女の姿を見ると、老婆は、膝の上に抱いた巨きな蟾蜍に口移しに餌をやりながら、かう言葉をかけました。

『おまへさんの用はわかつてゐるよ。おまへさんは人魚の姿をやめて人間の仲間入りをし、あの美しい皇子のお嫁さんになりたいのだらう。それはよくない了簡だが、おまへさんが强つてさうしたいと云ふなら、わたしの力でしてあげない事もない。』かう云つて老婆は薄氣味わるくクッ〳〵と笑ひました。

『それにはいま水藥をこしらへてあげるから、おまへさんは明日の朝夜明まへにそれを持つてあの皇子の殿のそばの砂濱へ漕ぎつき、そこで飲めば

よいのだ。さうすればおまへさんのその尾鰭は見る間に無くなつて、人間と變らない二本の足が新しく生える。――けれど、斷つて置くが、その足でおまへさんが一歩でもあるくとその度に、おまへさんの蹠は恰度磨いだナイフの刃の上を渡つてゐるやうにたまらなく痛むのだよ。けれどこれはもと〳〵法外の望みを起した報いだからしかたがない。どうだ、この辛抱が出來るかね？』

『辛抱します。』と聲を顫はせて王女が答へました。今やどんな憂目を忍んでもあの皇子のお嫁さんになり、人間と同じの死なゝい靈魂を得たいと云ふ心が、王女の胸に一杯になつてゐました。

『それから。』と老婆は言葉を續けて『おまへさんが一遍人間の姿になつたら、もうどうあつても二度とはこの海の中のお父さんやお母さんの處へは戻れないのだよ。そして、何よりも一番大切なのは、もし、おまへさんがそんなに想つてゐるのに、あの皇子がおまへさんで無い他の人をお嫁に貰ふやうなことがあつたら、その婚禮の翌日におまへさんの心は裂けて、身體はあの波

の上の泡沫と消えてしまふのだが、それも覺悟してゐるかね。』

王女は眞蒼な顏をして、それでもやつぱり合點合點しました。そこで老婆は奇妙な水藥をこしらへて王女に渡しながら云ふには、

『さ、ではこれを上げるからその御禮におまへさんの自慢のその美しい聲を貰ひたいものだ。』

『え？』

と王女は驚いて、

『この聲が無くなつたら、なにが後へ殘るでせう？』

と、悲しく云ひました。

『それはおまへさんの美しい顏と姿だ。それさへあれば大丈夫皇子のお友だちになれるよ。さ、藥が欲しかつたらその舌をお出し。』

仕方なく〳〵王女は口をあいて、可愛いゝ舌をさし出しますと、老婆は用捨もなく、鋏でチョキンと切り取つてしまひました。

一言ももの云ふ事が出來なくなつた哀れな王女はたゞ人間になれると云ふことの嬉しさに、大切な藥の罐を片手にもと來た路をイソ〳〵とお城まで歸つて來ました。見るともはやお城の窓には燈影がひとつも見えず、シンとして寂靜つてゐますので、とりあへず庭に並んでゐる姉さんたちの花壇から一つ〳〵花を毟りとり、それにやさしい接吻をして、それとなく別れをつげ、碧い水の面へと泳いでのぼつて行きました。

人魚の王女が皇子の御殿ちかくまで泳ぎついた時には、まだ日がのぼつてゐませんでした。砂の上に坐つた人魚は、手に持つた藥を思ひ切つて一飲みに飲みほしますと、腸がちぎれるやうな苦しさが總身に泌みて、それなり氣を失つてそこに伸

れてしまひました。

やがてふと眼を睜いてみますと、日はいつか海の上に高くのぼにり、傍はあの懷かしい美しい皇子がチッと自分をみつめて立つてゐました。

人魚は思はず、自分の身體を見まはしました。すると、うれしいことには、あのいやな尾鰭はいつの間にか無くなつて、その代りに、眞白な足が、二本生えてゐました。

皇子は、氣のついた人魚に優しくいろいろなことを訊ねられましたが、物の云へない人魚の王女はただその青い、深い海の色をした眼に悲しさうな色を浮べて、チッと皇子をみつめてゐるだけでした。

皇子は此美しい啞の娘をたいそう哀れにおもつて、自分の御殿へつれて歸り、綺麗な衣裳を着せて、毎日の遊び友だちにしました。（中編ゑほり）

進軍の歌（スティーヴンソン）

西條八十

櫛を持つてきて彈き鳴らせ！
それそれ、さつさと進んだり！
キリイは帽子を横かぶり
ヂョニイが太鼓をうち叩く。

メーリ・ヂェーンが指揮官で
ピータが殿ひきうけた。
足並そろへて油斷せぬ
みんなは近衞の兵隊さん！
軍律たゞしく速足で

進めや、杖のうへ高く
布巾の旗が
ひるがへる！

名譽も獲物も澤山で
ヂェーンの指揮官大成功！
村中ぐるりと廻つたら
どれどれ、お家へ戻りませう。

山六爺さん（八）

沖野岩三郎

二疋の猪は、隨分荒い性質でありましたが、間もなく馴れて了つて、爺さんが其の耳を引ッ張つても、婆アさんが其の尻尾を引いて見ても、最う唸りもせず牙も剝き出さず、默つて溫順しくしてゐるやうになりました。

そこで家來の爺さんは或日、殿樣の紀伊の守き右衞門を呼んで、

『き右衞門さん、誠に濟みませんが、今日は山へ行つて大きな杉の木を斫り倒して夫れで圓い車の輪を作つて來て下さいませんか。』と言ひました。

『へい〳〵御家來樣、畏りました。車の輪を幾つ作るのでございますか。』紀伊の守は丁寧に叩頭をし乍ら言ひました。

『さうですナ、十六作つて下さい。』

『宜しうございます。』

紀伊の守は早速、大きな鋸と斧を提げて山へ登つて行きました。

暫くすると後の山で、チャーン、チャーン、と樹を斫る音が聞えました。夫れを聞いた婆アさんは吃驚して、

『爺さん〳〵、誰かと、後の山の杉の大木を斫つてゐます。木を盜む泥棒ぢやアないでせうか。』と問ひました。

『なアに、紀伊の守だよ、私が言ひつけたのですよ。』

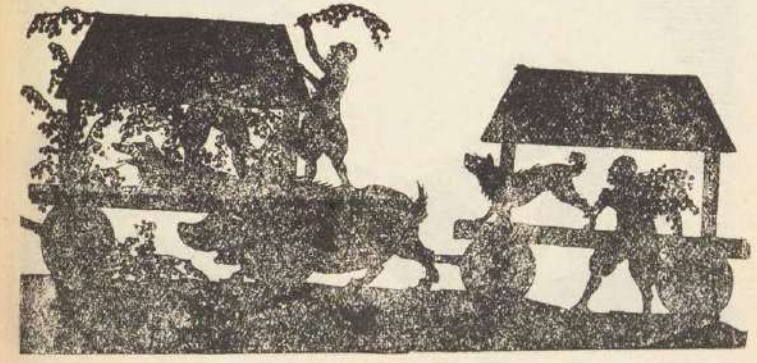
『さうですか、紀伊の守が木を斫るんですか。』と云つて婆アさんは笑ひました。

夕方、き右衞門は直徑三尺厚さ一尺ばかりもある、大きな輪切りにした杉を、十六も山の上からコロ〳〵コロ〳〵轉がして來ました。

『これは立派な車の輪だ、これは宜い！』と云つて爺さんは頻りに感心しました。

さア、其の翌日から王樣も殿樣も總がかりで大きな立派な車を四つ作りました。一臺の車に四つの大きな圓い輪がついてゐました。

車が出來上つた時、爺さんは二疋の鹿と、二疋の猪とを馬の代りにして其の車を曳かせました。

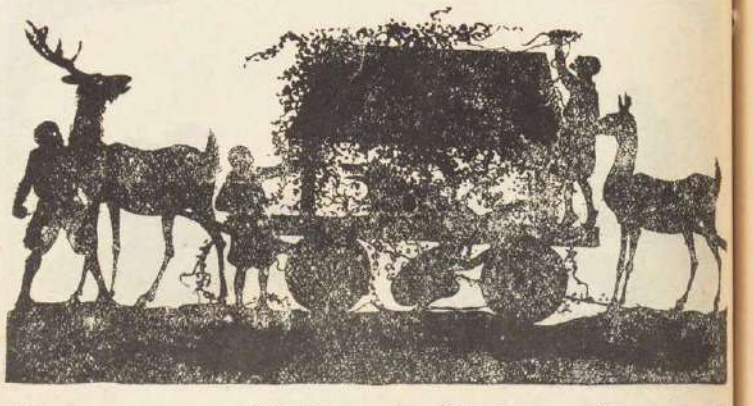


『さア、今日は新しく作つた車の發車式だから皆な出て來て、手傳つて下さい。』と爺さんが言ひますと、『さア、發車式々々々。』と口々に言つて、王樣も殿樣も總出で、車を引ッ張り出して夫れを飾つたり、手綱を結びつけたり大騒ぎを致しました。

雄鹿が一番前の車を引ッ張る事になりました。夫れは赤や白の美しい花で屋根を飾つて、車の外に青い蔓草が四方へぐる〳〵と美しく卷きつけてありました。下には絹の座蒲團が敷いてありました。總大將軍樣は、フーン！　と大きな鼻の穴から唸るやうな息をして、前足を揃へて、其中へひよいと飛び込みました。すると播磨の守は右衞門は、

『總大將軍樣のお顏が見えては勿體ない。』と云つて、蔓草をぐるぐると何重にも外から捲きつけました。

第二の車は牝鹿が引ッ張りました。屋根は花の咲いた木の枝で美しく飾りました。車の三方には、花の咲いた美しい木の枝を中の見えない程、ぎッしりと並べて結びつけてありました。總大將の奥樣が、ウーウと唸り乍ら其の中へゴッ〳〵と這ひ込みますと、土佐の



守と右衞門が其の入口へ蔓草を卷きつけて、

『總大將軍の奥樣のお顏が見えては勿體ない。』と申しました。

第三の車は雄猪が引ッ張りました。これには副將軍の「クロ」が乗りました。車は屋根にも周圍にも　飾りをしてゐませんでした。

第四の車は雌猪が引ッ張りました。これには家來の爺さんと婆アさんとが乗りました。此車には屋根も何もありませんでしたから、爺さん婆アさんは、日天こ乾しで、爺さんは刀を提げて、婆アさんは少しく破れた紙の旗をもつて乗込みました。

いよ〳〵發車式だと云ふので、四十七人の王樣や殿樣は、づらりと庭先に並びました。爺さんは刀をもつて立上り乍ら、美しい聲で發車式の歌を歌ひました。

とろり〳〵と、出た聲なれど……

風にとられた、川風に……

爺さんが歌ひますと、四十七人は皆な手を拍いて、『よういー、よういー。』と囃し立てました。歌がやむと同時に、筑前の守ち右衞門が、大きな聲で、『しいーッ』と叫びました。

すると、牡鹿は車を引ッ張ッて、とッと、とッと、と歩き出しました　牝鹿も猪も皆な其の後へついて歩きました。

ざいー　ざいー　と車の輪が軋りました。車の中では總大將軍も副將軍も氣持よくコクリ〳〵と坐睡りを初めました。爺さんは嬉しくて嬉しくて堪らないから、又た、

とろり〳〵と、出た聲なれど……と歌ひました。後へぞろ〳〵と、ついて來た四十七人も、あんさり車の輪が旨く轉がつて行くのが嬉しかつたもので、今度は特別に大きな聲を張上げて、『ようい、ようい……』と囃しましたので、鹿も猪も何事が起つたのか知？と思つて吃驚して一生懸命に駈け出しました。

總大將軍を乗せた車を引ッ張ッてゐた雄鹿は大きな角を振立て乍ら、矢のやうに野原を東の方へ走りました。奥樣を乗せた雌鹿は飛ぶやうに西の方へ走りました。「クロ」を乗せた雄猪は稲妻のやうに南の方へ走りました。

『車を止めろ〳〵、大變だ、大變だ。』と爺さんが叫びますと、四十七人の中で一番力自慢の筑前の守ち右衛門が、爺さん婆アさんの乗

つてゐる車の後を、ぐッと摑みましたが、雌猪は平氣で、ぐん〳〵と前の方へ走りました。

『止めて呉れ！』とち右衛門が泣聲を出して言ひますと陸前の守は、氣で走るので、尾張の守も若狭の守も、さては四十七人の王樣殿樣が、珠數繋ぎになつて、後へ〳〵と引ッ張りましたので、やッとの事で、雌猪は靜かになりました。

爺さんは眞青くなッて車を降りましたが、婆アさんは旗を持つたまゝ腰を抜かして、ブル〳〵慄へてゐました。

『あゝ〳〵恐ろしかッた、もう二度と車なんぞに乗るものではない。』と言ひ乍ら、爺さんは婆アさんを車から抱き下しました。

『まア〳〵怪我が無くッてよかッた。』と言つて四十七人も喜びました。所が爺さんは、不圖前の方を見ますと、其所には總大將軍の車も、副將軍の車も、影も形も見えないので、

『大變だ、大變だ、總大將軍、副將軍の御車が見えない！』と叫びました。

爺さん婆アさんを助ける事にばかり、氣を取られてゐた一同は、呆氣に取られ乍ら、四方をぐる〳〵見廻はすと、遙か東の方に、花で飾つた車が、矢のやうに走つてゐました。遙か西の方の山の麓を、木の枝で飾つた車が、飛ぶやうに走つてゐました。遙か南の方のダラ〳〵上りの坂を、青い蔓草で飾つた車が、稻妻のやうに山の中へ走り込んでゐました。『大變だ、大變だ。』と叫び乍ら、四十七人は三方へ分れ〳〵になつて車の後を追ひかけました。

爺さんは腰の拔けた婆アさんを介抱し乍ら小高い所で、車の行衞を見てゐますと、今度は今まで靜かにしてゐた雌猪が空車を引ッぱッて、北の方へズン〳〵と驅け出しました。

『こりや！　待て雌猪！』

爺さんは喉の裂ける程大きな聲で叫び乍ら後を追ッかけて行きました。けれども猪は、瞬くまに杉林の中へ車を引ッ張ッたまゝ驅け込んで了ひました。で、爺さんも轉げるやうに杉林の中へ驅け込んで行きました。

殘ッた一人取殘された婆アさんは、ぽかん！　として、草の上に

坐つてゐましたが、ぼつり〳〵と眼が開つて來ました。

『おや！　雨だぞ！』と云つて婆アさんは立上らうとしたが、腰が拔けてゐるので、足が立たないのです。困ッたなア、と思つてゐるうちに、空は一面に眞黑くなりました。ピカリ〳〵と稻妻が光りました。ゴロゴロッ！　と雷が鳴り出しました。

『誰か來て下さい……私は腰が拔けて足が立ちません……』と泣聲で呼びましたが、皆な車を追ッかけて行つたので、誰も助けに來て呉れませんでした。

婆アさんは、ヒイ〳〵と子供のやうに泣いてゐますと、

『どうしたのです？　婆アさん！』と云つて右の方の細路から呼びかけた者がありました。

婆アさんは『誰か知ら？』と思つて、聲のした方を振向きますと、其所には見知らぬ男や女が十人ばかり立つてゐました。

『もし〳〵、あなた方は、どちらの御國のお方でございます？』

婆アさんが問ひますと、一番前に立つてゐた男が、

『私共は乞食ですよ、おこもさんですよ。』と言ひました。（つゞく）

支那伊蘇普物語（四）

楠山正雄

（一）沈んだ劍

或男が舟に乘つて河をわたるとき、ゆるんだ帶をしめなほす拍子に、腰につるしてゐた劍が鞘からぬけて、舟べりをすべつて、水の中に沈んでしまひました。けれどもその男はさしてあわてもしずに、ゆる〳〵懐から、もう一本の短刀を出して、劍のすべつた舟べりの處へしるしをつけてゐました。

『劍のすべつたのはここのとろだから、この下をさがせばわけはない。』とその男はとくいらしい顏をしていひました。けれどもさういふ間にも、舟はずん〳〵水の上をながれて行つて、いくらしるしをつけた下の水底をさがしても、劍が沈んでゐようはずがありませんでした。

自分一人の智慧をたのみにして、世の中の道むことを知らない人は、舟にしるしをつけて、水の中の物をさがす男の仲間です。

（二）鳳凰と熊鷹

鳳凰といふ鳥は鳥類の中の王様と仰がれる高貴な鳥で、どんなに羽が疲れても青々とした桐の樹の梢でなければ決してとまりませんし、どんなに喉がかわいても、甘露の泉でなければ決して飲みません。

ある時一羽の鳳凰が南の海から北の海へ飛んでゆく途中ある山の上を通りかゝると、一本の枯枝に欲張つた目をした熊鷹が、どこからか死んだ古鼠をくわへて來て、その腐れ肉をせつせとつゝいてゐましたが、頭の上に鳳凰の羽音がすると、びつくりして、ぎやあ〳〵鳴き立てました。

せっかくの御馳走な鳳凰がさらひでもやるとおもつたのでもあらうが、鳳凰はふりむきもしずにとんで行つてしまひました。

いやしい人間は、自分のさもしい心をめどにして、りつぱな人の心までもはかりたがるものです。

（三）朝三暮四

むかし宋の國に狙公といつて大そう猿の好きな人がありました。

たくさんの猿を飼つて、毎日猿と一緒になつて、おもしろさうに遊んでゐました。狙公には猿の心がよく分かるし、猿も狙公の御機嫌を上手にとりました。そこで狙公はいよ〳〵猿が可愛くなつて、ありつたけの身代を猿のためにつかつてしまつたものですから、すつかり貧乏になつてしまひました。

もうか〳〵してゐると猿と一緒に自分も食べるものがなくつて死ぬ外はないやうになりましたから、少しづつ猿の食べものをへらしてやらうと思つて、或時、猿をのこらず呼びあつめてまづ、

『これからお前たちの毎日の食べものを極めて上げることにする。朝は栗を三つあげる、そして晩には四つあげることにしよう。』

といひますと、猿はみんな眞赤になつて、きやッ〳〵怒り出しました。狙公はそれを見てにこ〳〵笑ひながら、

『お前たちはすくないので氣に入らないと見える。それでは、朝が栗四つ、晩が栗三つときめよう。』

かういふと、猿どもは、また、きやッ〳〵いひながら、こんどは、おじきをして、うれしがりました。

何でも欲ばつかり張つて、智慧の足りないものには、目の前の利益だけしか、わからないものです。

水瓶の買物

鈴木善太郎

ある瀬戸物屋が、今仕入れをしたばかりの大きな水瓶を幾つとなくその店先に並べて置きました。

そこへ近所の子供達が寄つて來て、水瓶の間をくゞつて歩きながら、かくれん坊をして遊んでゐました。

主人がそこへ出て來ました。

『おい〳〵、お前達は邪魔だな。みんなあつちへ行くんだ〳〵。』と主人が見るより怒鳴り立てました。

子供だちの中に、猪之介といふ、腕白者がゐました。

猪之介は、一つ主人にからかつてやらうと思ひました。

『僕達は遊んでゐるんぢやないよ。うちのお爺さんから水瓶を買つて來いと云ひつかつて來たんだよ。』と猪之介は云ひました。

『何？　水瓶を買ひに來たつて？』と主人は目を聞くして訊き返しました。

『さうさ。僕はをぢさんとこのお客樣ぢやないか。あんまり失敬な事を云つて貰ひたくないもんだ。』

猪之介は威張つて云ひました。

『嘘をつけ。この大きな水瓶は、大人だつて一人では持てやしない。お前のやうな子供を買ひによこすなんて事があるもんか。』

『僕に持てないつて？　こんな物何だい。僕はどんな重い物だつて持つて行けらア。僕をぢさんのやうな骨無しぢやないんだ。』

『よし、ほんたうか。お前がもしこの水瓶を一人でうちへ持つて行くなら、安く負けてやる。』と主人は負けない氣で云ひました。

子供達は猪之介が何と答へるかと眼つて、黙つて聞いてゐました。

『安く負けるつて、いくらにするんだい。高くちや厭だよ。』と猪之介は云ひました。

『一つ十錢ならどうだ。』と主人が云ひました。

『十錢なら幾つでも賣るかい。』と猪之介は訊き返しました。

『うむ、幾つでも賣るよ。然し大勢で運んだんぢや駄目だよ。』

『人に手傳つてなんか貰やしないよ。僕一人で運ぶから、あとで十錢ぢや賣れないなんて云つたつていけないよ。』

猪之介はさう云つて、自分のうちへ走つて行きました。

『母さん、お錢お呉れ。』

と、猪之介が云ひました。

『さつきもお錢をつかつたぢやないか。さうさうお錢ばかりつかつてはいけないよ。』と母さんが云ひました。

『いゝからお呉れつてば……お呉れつてば……。』と猪之介は鼻聲になつて甘へるやうに怒鳴りました。母さんからお錢を貰へないと、折角もくろんだ事が無駄になるのです。猪之介はどうしても十錢丈けせびつて行く決心でした。

『仕方がない子だね。ぢやア今日はもうこれきりだよ。』

母さんはたうとう根負けして、十錢銀貨を一枚投げてよこしました。

猪之介は鬼の首でも取つたやうな氣がしました。十錢銀貨を掴むとすぐ、どんどん瀬戸物屋の方へ走つて行きました。

『おぢさん、さア十錢持つて來たよ。』

と、猪之介は、瀬戸物屋の店先から怒鳴り立てました。

そして主人の前に十錢銀貨を投げてやりました。

近所の子供等は又集つて來ました。

『君はそれを一人で持つて行けるのかい。』と子供等は心配さうに見てゐました。

『君等はまア默つてゐたまへ。』

と、猪之介は仲間の子供等にむかつて、云ひました。

『僕はこれを十錢で買つたんだ。君等が證人だよ。僕は今これを自分一人で持つて行くから、そこで見てゐるがいゝ。』

猪之介は路端から石塊を二つ三つ拾つて來ました。

そしてそれを水瓶に投げつけました。水瓶はチヤリンと音を立てゝ、粉々に碎けました。

子供等はアッと驚きの聲を立てました。

『どうしたんだ。これを壞して了つて！』

と、瀬戸物屋の主人は、なほ一層驚いて云ひました。

『どうするもかうするも、僕の勝手だよ。僕が買つた以上は僕の物だからね。』猪之介は肩を張つて云ひました。

そして水瓶の碎片を一つ〳〵拾ひ集めて、それを何遍もかゝつて、すつかりうちへはこんで了ひました。

『どうだい、僕一人で誰の手も借りずに運んぢやつたらう。』

と、猪之介は、さも得意げに、鼻高々と、主人に云ひました。

主人は。

もう何とも云ひやうがないので默つてゐました。そしてその心の中では、十錢で賣るなんて、飛んだ事を云つたものだと後悔してゐました。

『こゝにある水瓶を皆僕買うよ。』と猪之介は又云

ひました。猪之介はもう金は少しも持つてゐませんでしたが、尙も主人を凹ますつもりで、かう云つて見ました。

『う……う……』

と、主人は妙に云ひ澁つて、それから一寸考へて云ひました。『そ、そりや……、こんなに、碎かないで、持つて行くなら、十錢で賣るがな……』

『じようだんを云つちやァいけなよ。』

と、猪之介は、鼻のさきで、セヽラ笑つて、云ひました。

『をぢさんは大人にも似合はない卑怯な事を云ふんだね。僕が買つた以上は僕の物ぢやないか碎かうが、割らうが、君のお世話は入らない事なんだ。をぢさんはさつき一人で持つて行くなら、皆十錢づつで賣ると云つたらう。こゝにゐる友達がみんな證人だ。僕一人でうちへ持つて行く以上、どうしても十錢づつで賣つて貰はなきや承知しやしない。』

猪之介は店先に坐つて怒鳴り立てました。猪之介は動かうともしませんでした。

『さうださうだ、猪之ちやんの云ふ通りなんだ。』

と、友達が口々に云ひました。そしてワイ〳〵はやし立てました。

一つ五圓もする水瓶を十錢づつで賣つてはたまりません。主人はさき程の一つ丈けは、行きがかり上諦めてゐましたが、あとの水瓶を皆そんな値で賣つてしまつては、身代限りをする外はありません。

主人は全く困つて了ひました。

『これはわたしの方が惡かつたんですよ。どうか勘辨してやつて下さいな。』

と、云つて、その家のおかみさんが、お菓子の包を持つて、奥から出て來ました。そして、そのお菓子を、猪之介や猪之介のお友達等に御馳走しました。

猪之介の友達等は

『萬歳々々！』

『勝つた勝つた。』

と、はやし立てて喜びました。

――これは江戸尾張町邊の出來事だと云ひますから、今の銀座邊の事なのでせう。

時代は安永年間で今からざつと百四十年ほど前の事です。

むかしの腕白小僧さん、なか〳〵、智慧のあつたものです。（ゑはり）

誰れが一番利巧でしよ

をか奈一 き一

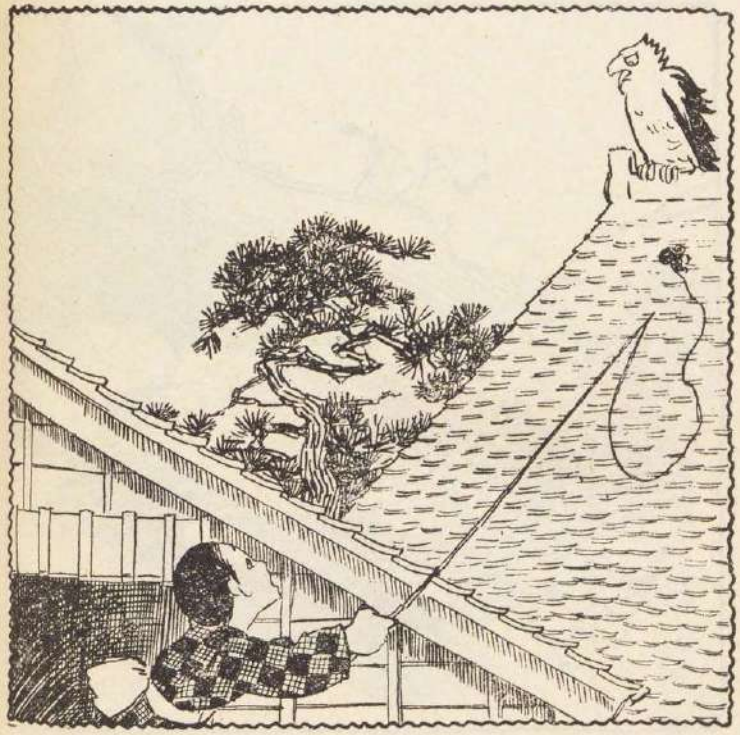
一

私等の小さい時分に、腰に籠をさげて、もち竿を持つて、大變上手に雀をさして歩く、をぢさんが居ました。私達もよくそのをぢさんの後からついて行きましたが、さわいで雀がにげて了ふので、をぢさんにこはい目玉でにらまれましたが、雀がほしくてしやうがありません。

二

春雄さんと博さんと私と三人で、誰が一番先に捕へるか競爭しようと約束をしました。

春雄さんは、さん〴〵考へて、何を思ひついたか、手を墨で眞黒に塗つてから泥まみれにして、毎日雀の來る庭先で、頭からすつぽり菰をかぶつて、手丈け出して、手の平へお米をのせて、雀が來て食べたらつかんでやらうと、炎天で半日もねて、待つて居ましたが、雀はたうとう食べに來ませんでした。



三

博さんのお家は、大きなお家で屋根のてッぺんに、よくとんびが止まつて居ました。

博さんはとんびをつかまへて、皆をおどろかしてやれと、兄さんのつり竿の針へ、お肴の腸をつけて、屋根の上へはうり上げて御飯も食べずに、一日待つて居ました。

博さんは、とんびをつるつもりだつたんださうですが、とんびは、知らん顔して居ましたとさ。

四

私は一度に二羽も三羽もとれる、いゝ考へがありました。

お父さんの毎晩召し上るお酒をないしよで、お茶碗に一杯持つて來て、其中へお米を入れておいて、あくる日そのお酒のしみたお米をまいておくと、雀が澤山よつて來て、皆な食べました。今によつばらふだらうと、一生懸命どこ泡も、追ひかけましたが、ちつともよいませんでした。私は今でも、それが不思議でなりません。

はり

大勇士イリヤア

馬場孤蝶

一

昔々、露西亞に老哥薩克と綽名されたムウロムのイリヤアといふ大勇士がありましたが、此の人は三十歳までは手も利かず、足も利かないで、臥たきりで動くことができませんでした。或る日のこと、兩親がイリヤア一人を殘して、土地を切り開きに出た留守に、三人の年取つた旅客がやつて來ました。それはその頃よくあつた神歌謠ひの連中でした。日本で云へば、先づ托鉢僧のやうなものです。所で、その三人の旅客は咽が渴いて居るから、何か飲み物を與れぬかとイリヤアに云ひました。

イリヤアは親切な男でしたから、『飲み物もあるし、それをあげ度くもあるのだが、此の通り私は、動け無いのだから、あげる譯に行かない、まことに

にお氣の毒だ。』と、丁寧に斷りますと、三人の旅客は、イリヤアに向つて、『起つて、身體を洗ひなさい、さうすれば歩るけるから、飲み物を吾々のところへ持つて來なさい。』と、云ひました。で、イリヤアは兎に角起たうとしてみますと、不思議なことにわけなくすつと起てました。歩かうとすると、ズン〳〵歩けました。クワスといふ露西亞の農家でよく用ゐる酸い飲み物をコップに一杯入れて、その年取つた旅客のところへ持つて來ますと、旅客たちはそれを受け取つて、飲んでから、その殘餘をイリヤアに飲めと云つて、さしだして、『イワンの子イリヤア、吾々と同じやうにこれを飲みなさい。』と云ひました。イリヤアがそれを飲んでしまふと、老人たちは、『何うだ、少し力が出來たかね？』と、イリヤアに云ひました。

すると、イリヤアは、『何うも有り難うございます、お年寄りたち。私は大變な力が出來たやうな心持がします。まるで地球でも動かしてしまへるやうな氣がします。』と、答へました。

三人の旅客は一寸顏を見合せましたが、直ぐ『もう一杯ください。』と、云ひましたので、イリヤアはもう一杯持つて來ますといふと、旅客たちは又それを少し飲んでから、その餘を矢張りイリヤアに飲ませて、斯う尋ねました、『今度は何うだね。』『非常な力です。前の力なんぞは此の半分にも當りません。』と、イリヤアが答へました。

『もう此れでいゝことにしよう、若し、お前に此上もつと力を與へてやれば、地面がお前の體の重みに堪へ無いことになるのだから。』と、老人たちは云ひました。

イリヤアが杯を卓子の上へ置いて、街へズンズン出て行きますと、三人の旅客たちは、『神さまが

お前に神さまの力をくだすつたのだ。だから、お前は基督の敎の爲めに戰ひ、異敎徒の大軍や、勇士たちを討ちなさい。お前は戰ひでは何うしても死なゝいことになつて居るのだ　唯お前より强い勇士はヴォルガとスヴイヤトゴオルとミクウラ。セミヤアニイヴイイチの三人のみで、他の者は皆お前の相手にはなり得ないのだ。それで、その三人とは爭はないやうにしなさい。お前は家に居すに、キイエフの都へ出て行きなさい。」と、云ふかと思へば、何處へとも無く見え無くなつてしまひました。

此の三人の旅客は基督とその二人の使徒であつたんです。

二

イリヤアが兩親の居る森の側の野へ行きますと兩親は雇人たちと骨休めの晝寢をして居るところでした。イリヤアは斧を取つて木を伐り倒し始めましたが、兩親と雇人たちとで三日かゝつてもでき無いほどの仕事をイリヤアは唯つた一時間で仕上げてしまひました。兩親が眼が覺めますと、四邊の木は皆切り倒してあつて、土地はもうすつかり切り開かれて居ました。一體此れは誰の仕事なのだらうと驚き怪んで居ますところへ、イリヤアが森の中から出て來て、すつかり譯を話ししまたので、兩親の喜びといふものはありませんでした。

イリヤアはその後、廣野を歩いて居ましたところが、百姓が一疋の强さうな仔馬を引いて來ました。イリヤアは百姓の言ひ價通りにその仔馬を買ひ取つて、それに最も上等の白い土耳古麥を食はせ、非常に清い泉の水を飲ませ、三月の間大切に飼ひ立てました。それから、その後で、三晩戸外へ出して置て、天の露で身を清めさせました。それが濟むと、それを高い垣根のあるところへ連れて行つて、それを跳び越すことを敎へました。馬は直きに何んな高い垣でも跳び越すことができるやうになり、イリヤアを乘せてやす〳〵と走ることができるやうになりました。これも皆祖の三人の旅客が敎へて行つた事であつたんです。

其所で、イリヤアはその馬をば白雲と名づけまして、それに鞍を置き、兩親の前へ出て、旅に出る許を受け、廣野へと乘り出しました。

そのうちに、樫の樹の下に白いリネンの天幕の張つてあるところへ來ましたので、その中へ入つて見ますと、勇士の寢床らしいものが出來て居ました。それは長さ十尋（一尋は六尺餘）幅六尋といふ決して小く無い寢床でした。イリヤアはこれは旨いなと思ひまして、その寢床へ入つてぐつすり睡込んでしまひました。勇士の眠のことですから、却々長いのでして、イリヤアは三日三晩高鼾で睡通しました。

所が、三日目に北の方から非常に大きな音のして來るのが馬の白雲の耳に入りました。それは實に非常な音でして、大地は

搖れ、黑い森はよろ〳〵し、河の水が河床から震り出されて岸を越えて溢れ出すといふ騷ぎでした。

で、馬は蹄で強く地面を叩いて、イリヤアを起さうとしたのですが、イリヤアの眼はなか〳〵覺めません。到頭馬は人間の聲を出して、斯う云ひました。

『やア、旦那、ムウロムのイリヤア。旦那は平氣で睡ておいでゝすが、今大變なことになつて來ましたぞ。勇士スヴイヤトゴオルが此の天幕へ返つて來たんです。さア、私を解き放すと共に、旦那は樹の上へお隱れなさい。』

イリヤアは跳び起きて、馬を解き放し、自分は傍の樫の樹へ攀ぢ上りました。

三

程もあらせず、當の勇士がやつて來ました。春は森の如く高く、頭は空を走る雲の中に入つて居ました。腰に水晶の箱を嚙せて居ましたが、樫の樹の下へ來ると、その箱を地面へ置いて、黃金の鍵でその箱を開けました。すると、不思議なるかな、その中から一人の女が出て來ましたが、これはスヴイヤトゴオルの妻でした。此の世には何處にもあるまいと思ふ程の實に美しい女でした。春はすらりと高く、歩き方は如何にも優美で、眼は鷹の眼のやうに澄み渡つて居り、眉は最も黑い黑貂の色であり、肌の白さは譬ふるに物無き程でございました。

で、その美しい女は食卓を置いて、綺麗な布を掛け、旨い食物を列べ、水晶の箱から酒を取り出しました。それで、勇士とその妻は陽氣に飲食しました。で、すつかり腹を張らしてしまふと、スヴイヤトゴオルは寢床へ入つて睡込んでしまひました。

けれども、勇士の妻の方は廣野をぶら〳〵歩きだして、やがて槲の樹の上に隱れて居るイリヤアを見付けました。

『さア、其所な善い立派な若者。その樹から下りておいで、下りて來なければ、スヴイヤトゴオルを起して、お前さんの無禮を云ひ付けてやるよ。』

と、その女が云ひました。

イリヤアは、相手が女であるのだから、何ともし方が無いので、女の云ふまゝに、樹から滑り下りました。

やがて、女はイリヤアをば夫のスヴイヤトゴオルの深い衣兜の中へ入れて置いて、熟く睡て居るスヴイヤトゴオルを起しました。スヴイヤトゴオルは妻を双元の通り水晶の箱の中へ入れ、黃金の鍵で錠を下し、それを持つて、馬に乘り、自分の住居の「神聖山」へと向ひました。

所が、少し行くと、何うした事だかスヴイヤトゴオルの馬が頻りに躓きだしましたので、スヴイヤトゴオルは馬の腹をば絹紐の鞭で打ちました。すると、馬は人間の言葉を出して、斯う云ひました。『私はこれまで旦那と奥さんだけを載せて居ましたが、今日はその外に勇士をも一人乘せて居ります。私の躓くのに不思議は無いでせう。』

其所で、スヴイヤトゴオルは衣兜の底からイリヤアを引つ張り出して、お前は何者で、一體何うして衣兜の中へ入つて居たかなどといろ〳〵問ひました。イリヤアは隱くす譯に行かなくなつて、實際の事を話しました。スヴイヤトゴオルは大に憤りまして、妻を一擊の下に殺しましたが、イリヤアとは兄弟の約を結びました。

いろ〳〵物語をして居るうちに、イリヤアが『大勇士スヴイヤトゴオルには是非逢ひ度いと思ふんですが、彼の勇士は最早此世には出て來ないし、吾々の仲間にも加はつて呉れ無いので、まことに殘念です。』と云ふと、『いや、私がそのスヴイヤトゴオルなんだ。君等の仲間に加はり度いとは思ふんだけれども、到底並の地面は私を載せて居ることはできないんだ。それに、私は聖なる露西亞を乘り廻り度く無いんで、何時も高い巖山ばかり乘り歩いて居る。さア、一緒にその巖山を乘り歩かうぢやないか、さア君、私と一緒に「神聖山」へ來給へ。』と、スヴイヤトゴオルが云ひました。

四

それから、二人は長い間乘つて行きましたが、

その途々スヴイヤトゴオルはイリヤアに勇士の習慣や言ひ傳へを悉く敎へました。それから、スヴイヤトゴオルはイリヤアに斯う云ひました。『私の家へ行つたら、私は君を私の父に紹介する。けれども、私の父は非常に力が强いんだから、君が握手しようものなら、君の手は握り碎かれてしまふ。だから、君は鐵の棒を眞赤に燒いて置いて、それを私の父に握らせなければいけない。』

やがて、二人は「神聖山」の白い石の宮殿へ着きましたが、スヴイヤトゴオルの父親の『やア、伜、何所まで行つた？』といふ聲が聞えました。スヴイヤトゴオルが『聖露西亞へ行きましたよ、父上様。』と答へると、父親は、その聖露西亞では何か變につた事でもあつたかと尋ね、スヴイヤトゴオルが『いや、別に變つた事は聞きも見もしませんでしたが、唯勇士を一人連れて來ました。』と云ふと、『よし、その男を此所へ伴れて來い、俺が挨拶するから。』と、父親は云ひました。スヴイヤトゴオルの父親は盲目であつたんです。

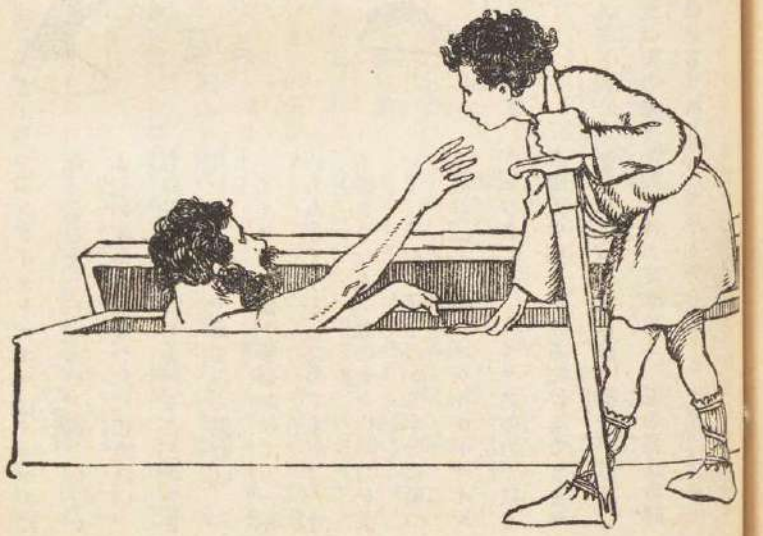
その間にイリヤアは鐵の棒を燒いて置きました。で、スヴイヤトゴオルの父親の傍へ行つて握手することになりますと、イリヤアは自分の手は出さずに、鐵の棒を老人に握らせました。老人はそれを握つて、『お前の手はなか〳〵强い。お前は實に傑い勇士だ。』と云ひました。

五

イリヤアはスヴイヤトゴオルに伴れられて、神聖山をはうん〳〵判いたのですが、一つの棺の置いてあるところへ通りかゝりました。棺の蓋には、『此の棺は此の中に入る運命になつて居る者の寸尺に合ふ。』と書いてありました。

其所でイリヤアはその中へ入つて臥てみましたが、イリヤアには長過ぎもし、廣過ぎもしました。けれども、スヴイヤトゴオルが中へ入つてみますと、それは長さも幅もピッタリ合ひました。其所でスヴイヤトゴオルは斯う云ひました。『此の棺は私の入るべき棺なんだ、おい、イリヤア、蓋を取つて、上へ置いて臭れ。』が、イリヤアは『兄貴、私は蓋を取ることも、それを上へ置くこともしないよ。自分で墓へ入るなんて、そんな冗談はすべきものぢやア無い。』と、云つて、スヴイヤトゴオルの言葉に從ひませんでした。

けれども、スヴイヤトゴオルが自分で蓋を取つ



で、スヴイヤトゴオルはイリヤアに斯う云ひました、『おい、弟。いよいよ私の運命に出逢つたに相違無い。私は此の蓋を持ちあげることができない、君一つやつてみて呉れ。』

イリヤアも蓋へ手をかけて力一杯持ちあげようとしたのですが、一寸も動きません。『私の大きい陣刀を拔いて、それで蓋を外から半分に斬つて呉れ。』と、勇士スヴイヤトゴオルが云ひました。イリヤアの力ではその陣刀を振りあげるだけもできませんでした。スヴイヤトゴオルは斯う聲をかけました。『棺の緣まで顏を持つて來給へ、私の勇士の呼吸を君に吹き込んでやるから。』

で、さういふ風にして、勇士の呼吸を吹き込んで、それで棺を蓋ひました。所で、スヴイヤトゴオルが棺から出ようと思つて、その蓋を持ちあげようとしますと、それが何うしても持ち上げられません、何れだけ力を出しても駄目でした。其所で貰らふと、イリヤアの力はそれまでの三倍になつたやうな心持がしました。イリヤアはその大きい劍を振り上げて、蓋が眞つ二つになれと、斬り付けました。その一擊で蓋からはパッと火花が散つた。けれども、劍の當つたところは鐵の輪のやうなものが出て來たのみで、蓋は破れ目さへ出來ない。スヴイヤトゴオルは又『うん、息が苦しくなつた。おい、弟、その大きい劍でもう一度斬つてみてくれ。』と、云ひました。其所で、イリヤアはもう一遍蓋を横に力一杯叩きましたが、矢張りその劍の當つたところへ鐵の輪のやうなものが現て來たのみでした。

其所で、スヴイヤトゴオルが斯う云ひました、『私は此れで死ぬ。隙間のところへ顏を持つて來なさい。もう一度私は君に息を吹つかけて私の持つて居る強い力を悉皆君に吹き込んでやるから。』

けれども、イリヤアは、『冠貴、私の力はもう此れで十分だ、若し此の上力が出來ると地面が私の重みに壊へて居られなくなる。』と、答へました。『私の最後の言葉に從はは無かつたのは大變可かつたな、弟。君が傍へ來たら、私は死息を君に吹つ掛けて、直ぐ殺してしまはうと思つて居たんだ。さア、此れでお別れだ。私の大きい陣刀を君の持ち物にし給へ、けれども、私の馬は棺へ繫いで行つて呉れ給へ、スヴイヤトゴオルより外は誰にもその馬は持たせ度くないからな。』と、スヴイヤトゴオルが云ひました。其所で、死息が棺の隙間からパッと出ました。イリヤアは勇士スヴイヤトゴオルに別れを告げ、棺へその勇士の馬を繫ぎ、大きい陣刀をば自分の腰に帶びて、廣野へと乘り出しました。

スヴイヤトゴオルの熱い涙が常久に棺から流れ出て居ました。（をはり）

きりぐ〜す

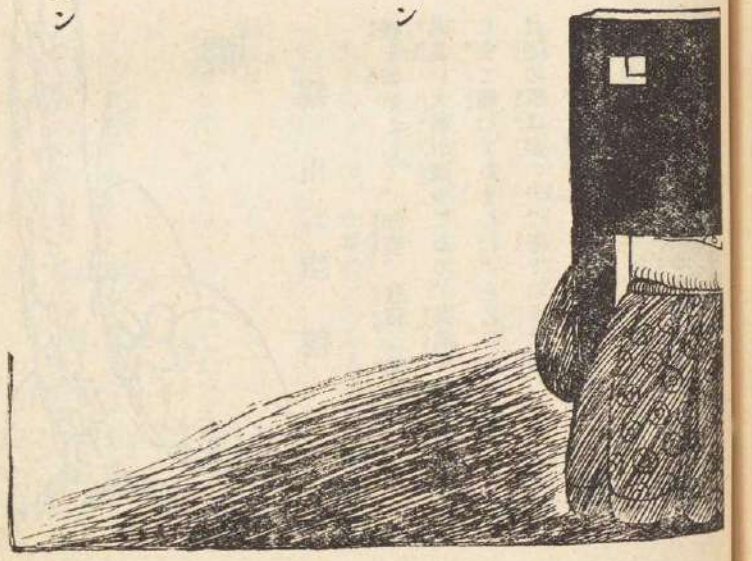
三木露風

秋の夜長のきりぐ〜す

ギイチョン、ギイチョン、ギイチョン

廻はる苧環
繰るごとに
絲にとまつた
きりぐ〜す
ギイチョン、ギイチョン、ギイチョン

蠟燭の
あかりがもえる
錫の皿
火かげにないたきりぐ〜す
ギイチョン、ギイチョン、ギイチョン



屋島の戰

窪田空穗

一

一の谷の戰で負けた平氏は、海をわたつて四國の讃岐へ行き、屋島に御所を拵へました。一の谷で大勢の大將が討死にしてしまつたが、まだ平宗盛を初めとして、知盛、敎經（能登守）などいふ名高い大將が殘つてゐて、安德天皇を護つてそこに立て籠つてゐました。そして心の中では、源氏は陸の軍は強いが、海での軍は知らない、海をわたつて來る軍勢ならば、十分に防ぐことができると思つてゐました。

平氏が屋島へ立て籠つてから三年目の正月（元暦二年）でした。義經は御白河法皇へ奏上しました、

『平家は今は、法皇にも見すてられて、都にもゐられなくなつてしまつた者でございます。それを、三年ものあひだ、そのまゝにしてあるのは、いかにも殘念でございます。今度は義經が、海のはてまでも攻めてゆきまして、敵を亡ぼさないうちは、この都へは歸るまいと存じます。』

さう奏上すると、法皇は義經の勇氣を御感心になつて、すぐにお許しになりました。

義經は、關東から隨つて來てゐる大名どもに云ひますには、

『今度義經は、法皇の仰をうけて、鎌倉殿（頼朝）の代理となつて、平家を討つために西國に下ることゝなつた。出懸ける上は、何所までも軍をするつもりだ。若しこれに文句のある者は、これからすぐ鎌倉へ歸つてしまへ。』と云ひました。

さう云つてからすぐに船の支度にかゝり、五六日すると、大阪から船出をすることにしました。その折から、强い風が起つて、船が破損したので、修繕するために、一日だけ延ばしました。船軍をしたことのない關東の大名たちは、この風で怖ぢけがついて、自分たちは、船軍といふものを習つたことがない、何うしたらいゝだらうかと評定を始めました。

大名のうちで、一番勢力のある梶原景時は、

『今度の船には、逆櫓を立てよう。』と云ひました。

義經は、

『逆櫓つて、何んなものだ。』と云ひますと、景時は、

『馬は、進ませようと思ふと進ませ、退かせようと思ふと退かせます。船も、馬と同じやうに、退かせる時もありませうから、その時の爲に、艫に

も軸にも櫓を立てるのです。』と云ひました。義經は打消して、

『縁起の惡いことをいふ。軍は、決して後へは退くまいと思つてゐても、場合が惡いと退くことがある。それを、初めから、そんな逃げ支度などして懸つて何うなるものか。あなた方の船へは、その逆櫓といふを、百挺でも千挺でもお立てなさい。義經の船はそんな物がなくてもかまはんから。』

さういふと景時は押し返して、

『いゝ大將といふものは、進んだがいゝ時には進み、退いたがいゝ時には退いて、自分を無事にして、敵を亡ぼすものです。あなたのやうな片意地な人を、猪武者といひます。』

義經は『猪のしゝか、鹿のしゝか知らん。とにかく軍は、懸引なしに勝つたが氣持がいゝ。』

關東の大名たちは、景時の勢力に怖れて、高くは笑はなかつたが、みんな小聲で、その臆病を笑つてゐました。

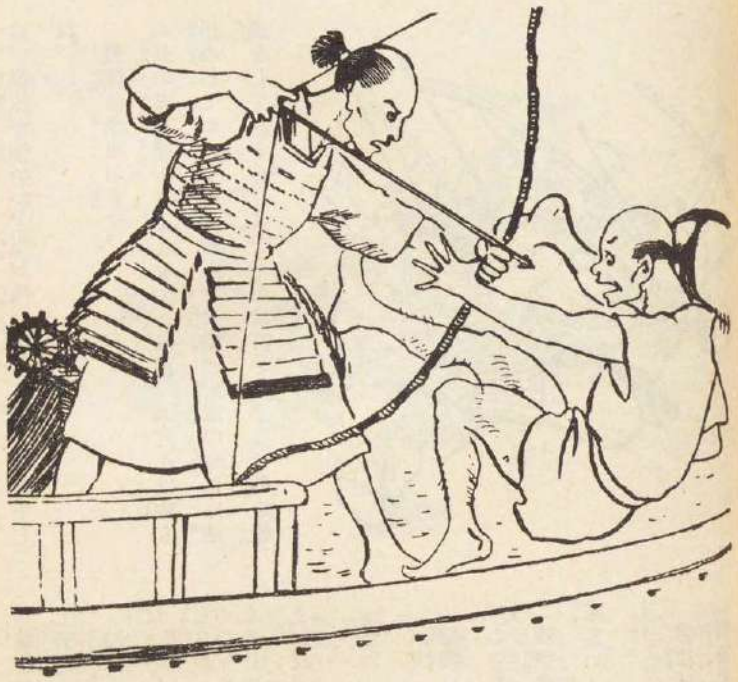
二

その夜でした。義經は、大名たちに、船も新しくなつたから、祝ひに一杯飲め、といつておいて、自分は船頭に向つて、

『船に、糧食、武器、馬を乗せて、出帆の用意を直ぐにしろ。』と命じました。船頭は、

『風は向風ではありませんが、少し強過ぎます、沖はさぞ強いだらうと存じます。』といつて出し渋ると、義經はひどく怒つて、

『海に出た上で、強い風が立つたからといつて止められるか。何所で死ぬのもきまつた運だ。向風に出せといつては義經が惡いが、追風が少し強いくらゐのことで、この大事の場合に文句をいふとは怪事だ。出せ。出さないなぞといつたら、此奴らを皆射殺してしまへ、家來ども。』



『畏りました。』と伊勢の三郎、佐藤嗣信、忠信、武藏坊辨慶などが、

『仰せだ、船を出せ、出さないとおのれ等、端から射殺してしまふぞ。』といつて、弓に矢を番へて驅け廻りました。船頭たちは覺悟をきめて、

『こゝで殺されても同じだ、若し風が強かつたら、沖で漕ぎ死にゝ死なう、なあ、皆。』

さう云つて、二百艘あつた船の中から、五艘だけ出すことにしました。義經の手足のやうになつてゐる家來の五十人ばかりが、それに分れて乗りました。外の船

は、梶原が怖いか、風が怖いかして出ませんでした。

義經は家來の者に、

『外の者は續かなくともかまはん。ふだんは敵も用心してゐようが、こんな大風、大波の時には油斷をしてゐよう。そこへ不意打をしよう。外の船へはけつして篝火を焚くな、義經の船のを目印にしろ。』

さう云つて大阪を出帆したのは夜半過ぎでした。そして夜つぴて船を走らせたので、ふだんは三日かゝる所を、六七時間に走つてしまつて、あくる日の朝は、阿波の國の勝浦といふ濱べへ着きました。

三

勝浦には、赤旗を飜した百騎ばかりの平家の兵がゐました。

義經はそれを追拂つて、その大將の、近藤六親家といふを降參させて、屋島への案内役いたしました。

義經は親家に、

『屋島には、平家の兵が何れくらゐゐる。』ときゝ

ますと、

『千騎は越しますね。』

と答へました。

『何だつてそんなに小勢なのだ。』

『手前のやうな風に、五十騎、百騎づつと小分けにして、四國中へ分けてあるからでございます。それに唯今、田内敎能が三千騎をひきつれて、伊豫の國の河野の四郎を攻めに行つてるからでございます。』

『さうか、それは誂向の折だ。これから屋島への道のりは何れ位だ。』

『二日路でございます。』

『よし、それでは敵の聞きつけないうちに寄せてやらう。』

義經はさういつて、阿波と讃岐の境にある大阪山を夜どほし越して、翌日は、屋島の館近い所まで押寄せました。

義經は親家を呼んで、

『屋島までの路の樣子は何んなだ。』と尋ねますと、

『御存じがないからそんなお尋ねをなさるのですが、海はひどく淺くて、潮の引いた時には、馬の腹までほどもない位でございます。』

『それでは、敵の聞きつけないうちに、早く寄せよう。』

義經はさう云つて、そこの高松の町へ火を放つて燒き立てゝ、屋島の館へ、ひた寄せに寄せてゆきました。

屋島の館では、高松の町から不意に火事の起つたのを見て、驚き、騷ぎ立てました。

『畫間のことだ、失火ではあるまい。何うでもこれは、敵が寄せて來て火を附けたものらしい。多分大勢だらう。取り捲かれては叶はない。早く、早く船にお乘りなさい。』

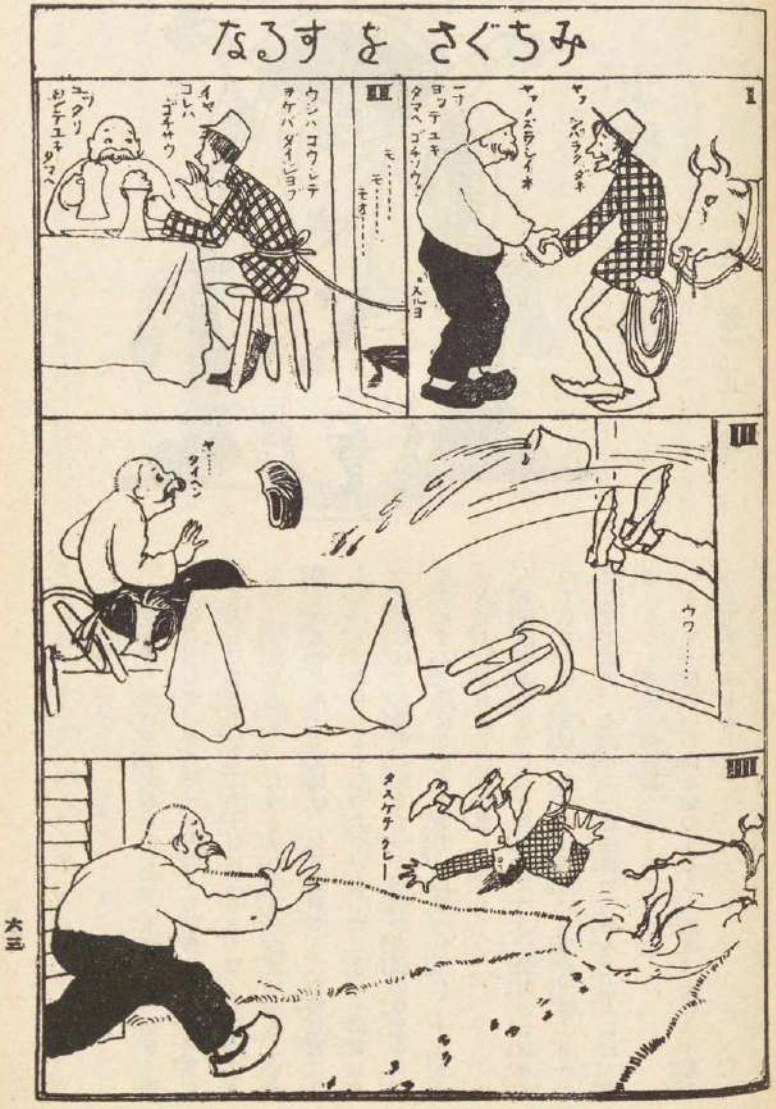
さう云つて、館の正門の前の渚に繫いであつた多くの船へ、我れがちに慌てゝ乘りました。天皇は、母后、二位の尼（平清盛の妻）などと一つ船に、平宗盛親子も一つ船に、その外の者も、それぞれ船に乘つて、海の上を一町ほども漕ぎ出しました。そこへ源氏の兵は、大勢に見えるやうにと小分けをして、白旗を擧げ、大聲に名乘を擧げながら驅けて來ました。

平家の者は、

『射てしまへ、射てしまへ。』といつて船から射ました。

源氏の者は、汀に殘つてゐる船の蔭に隱れながらも同じく矢を放ちました。

そのあひだに後藤實基は、後にのこつてゐて、屋島の御所へ火をかけて、燒きはらつてしまひました。



王様の退屈

久米正雄

一

金持ちで、強い王様がありました。王様は何不足なく暮してゐらつしやいましたが、そのうちに自分の、何不足ないくらしにあきあきしてお了ひになりました。と云つてまさか、王様をよして、もつと面白い外のお役になるといふ事も出來ません。で王様は、毎日退屈さうにお室に寢ころんで、欠ばかりしてゐらつしやいました。これを御覽なすつたお后は、大屬御心配なすつて、何か王様の退屈をおなぐさめするものはないかとお考へになつた末たう〳〵かういふおふれをお出しになりました。

『王様の御退屈をおなぐさめするだけの、面白いお話を知つてゐる人は、宮城へ來てその面白いお話を王様におきかせして下さい。その中で一番面白いお話をした人には、王様はきつと澤山の御褒美を下さるでせう。』

そこで、面白いお話を知つてゐる人達は、それ〴〵都をさしてあつまりました。

二

そのうち、王様が面白いお話をおきゝになる日が來ました。王様はいそ〳〵と、けれどさも退屈な人らしく億劫さうに、定めの玉座におつきになりました。見渡せば大廣間には、後ろの方の人の顔ははつきりと見えない程、面白いお話を持つた人が、ぎつしり坐つて居りました。王様は仰有いました。

『皆さんが何か、面白いお話をして下さるさうで、私は嬉しく思つてゐます。けれどどうか嘘の話だけは止めにして下さい。嘘の話なんかきかせて下すつたら、私はきつと退屈で死んで了ひます。』

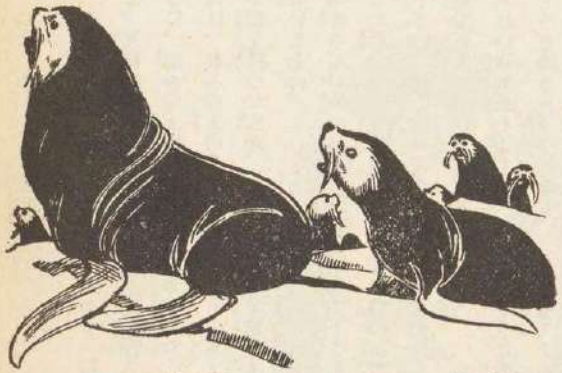
『はい承知致しました。では私がさきに申し上げませう。どうぞおきゝ下さいませ。これは嘘であるにも何にも、この私がした事なのでございますから、本當の事に於ては間違ひはございません。ところで、事の起りはかうでございました。』

とまづ第一に話しはじめたのは、外國と色々の貿易をして、この都に古くから住んでゐる、都一の金持と云はれてゐる商人でした。

三　商人のはなし

『私の家は代々この都に住む商人でございました。ところが父の代になりまして、色々と不幸がつゞきましたので、私の家はすつかりおちぶれて、私が二十歳位の頃は、其の日の食物にも不自由する程でございました。私はどうかして働いて、家を再びたてなほさうと思ひました。私には其の日其の日の、小さなたよりない働がいやでございました。私はどうかして、一度に澤山のお金が儲けたいと、そればかり思つて居りました。さうして考へたのが船乘りでした。私はさう思ひたつとすぐ、まだ私の家がよかつた頃出入をしてゐた人達の所へ行つて、少しづゝのお金を出して貰ひました。それは間もなく可なりの額になりました。私はそれだけを得ると、年老つた父母を色々と說いて、たうたう船乘りになる許しを受けて港に出てゆきました。そこで私は一隻の古い船を買入れ、らつこやおつとせいを

捕りに、北の海へ働きに行く船員を集めたのでございました。これはなか〳〵困難な仕事でございましたが、私はどうにか成功する事が出来ました。そして思つた數にはすこし足りませんでしたが、私は集つたゞけの船員と共に、古い船に乘つて、年老へた父母と別れ、なつかしい故郷の港を後に北の海に向つて出帆したのでございました。



けれどもその年は、なれない爲とおまけに不漁で、持つてゐた少しばかりのお金はすつかりなくして了ひました。さうして六人の船員にやる捧給が一文もなくなつた時、私は船員達にあやまらうかとさへ思ひました。けれども私は、私の成功して歸るのを待つてゐる父母の事を考へると、これではいけない、國を出る時の約束は何だつたと自分で自分をはげまして、たう〳〵船員に一切を打あけました。六人の船員は、今こゝで私と別れては、まつたくどうする事も出來ないので、私の考へてゐる事に贊成してくれ、そこで私達は命がけの覺悟をしまして、再びある淋しい國の港を船出したのでございました。さうして幾月か海の上を、あちらこちらとさすらつて居りましたが、ふと或日、地圖にもない大きな島かけに、遠くから見るともう一つの島かと思ふ程、おつとせいが黑く群づてゐたのを見つけたのでございました。そこで私は早速、その島を自分のものとして政府へ屆けまして、出來るだけ澤山おつとせいを取つて、まづ一旦故郷へ戻らうと、船路を急いで居ります時私共は或晩、かうした船をめがけて來る海賊船に見つかつて了ひました。私はすつかり灯を消させて、一生懸命逃げたのでございますが、海賊の方は新式な大きな船なので、從つて船脚も早うございます。そこでたう〳〵私の船は、デッキに鉤のはしをかけられやうとした一切那海賊船の方で何かたゞならない物音が致しました。私達はすぐそれが、流れて來た氷山のために、船が横腹を破られた音であるのを知りました。ほんとに何といふ、あぶない所でございましたでせう。

そのうち大騒ぎになつた海賊の方では、船底から澤山の荷物を運び出して參りまして、『もう私はあなたに危害を加へるなんて事はしない。どうか私達を助けて下さい。もし助けて下されば、この荷物を半分差上げる』と申すのでございます。私は何も海賊のお禮などはしくはございませんが、見す〳〵自分が助けなければ死んでゆく、四十人か五十人の生命を考へると、どうしてそのまゝにしてはおけませう。私はそれを承諾致しました。すると海賊共は大急ぎで、ありつたけのものを私の船に投げてよこし、さて今度は、自分が私の船に移らうとした時、やうやくそれまで堪へてゐた船は、急に片方へ寄つた人の重量で、づぶづぶと傾いたかと思ふと、乘組員の姿はまたゝく間に、一人殘らず大きな波の間に見えなくなつて了ひました。私は一人でもどうにか助げやうと思ひましたが、何しろ夜ではあるし、霧はおたがひの顔もはつきり見えない程たちこめてゐますので、その上かうした所に長居をしてゐては、他人を助ける所か、自分がどんな目にあふかわかりませんので、心ならずも私はそこを立去り、やがて一ヶ月ばかりして著いた或國の港で、海賊に託された荷物の事をとゞけ出ました。そこの政府では早速方々の國々に、海賊の船から

發見された品物の名を書いて、心あたりのある人は取りに來るやうにと、通牒を出したのでございました。私はその爲に一ヶ年ばかりその港に止つて居りましたが、その間どこからも誰も、又何の手紙も參りませんので、私はもうそれ以上止つてゐる必要もないので、其時公然と私のものになつた澤山の荷物を持つて、喜び勇んでゐる六人の船員と故郷の港へ歸つたのでございました。

いくら取つても取りきれない寶の藏、色々と珍らしい品物や、貴重な寶物のある、海賊からの賠物を持つて、華々しく貧しい家へ歸つた時、父母はまあ、どんな喜方をしましたでせう。それに私が被難者からの手紙を待つて、あの港に止つてゐた一ヶ年の間に、其年不漁だつたゝめ、おつとせいの皮は十倍もの價が出たのでございました。

思ひ出せばこれはもう、三十年もの昔になりました。けれど私は今でもこの話を、面白い私の出會つた事の一つとして誰方にもきいて頂くのでございます。』

商人の話はお終ひになりました。王樣は大層このお話がお氣に入つたので、商人に澤山の金貨をお遣しになりました。

次に王樣の前に表れたのは、粗末な風姿をした、一人の老人でございました。

四　老人のはなし

『どうぞ王樣もお后樣もおきゝ下さいまし。私はずつと遠い田舍から、この珍らしい話をきいて頂かうと、はる〴〵參つた老人でございます。これもまつたく私の息子にあつた事なのでございますから、やつぱり私の息子程、この話はたしかなのでございます。

さてその息子の事でございますが、これは生來の空想家で、何で讀んだか人からきいたかわかりませんが、この國をずつと西へ行つた國境に、白鳥の谷といふけわしい谷があつて、その谷底に數知れない程澤山のダイアモンドが埋つてゐると申すのでございます

そこはずつと昔、何でも戰に敗けたお殿樣が、追ひつめられて自害をなすつた處とかで、今でも雨の降る晩なぞは、陰氣な着い火がゆれるやうに谷の上を飛ぶと申します。

ところが息子は丁度十八の秋、突然私にその白鳥の谷へ埋れたダイヤモンドを探しに行く、と申したものでございます。私は驚きました。何しろその白鳥の谷といふ所は、名に似合はず恐ろしい、國中切つての魔所だといふ所でございますので、「まだ家では、命がけで埋れたダイアモンドを探さなくてはならない程、困つてゐるのではないから」と私は一度は止めましたが、一旦かうと思ひこんだ事は、引止められゝば引止められる程してみたい、といふのが息子の性分なのでございますので、それ以上止めるのは、ただ息子を怒らせるばかりと思ひまして、私はもしなか〳〵見つからないやうだつたら、さつさと歸つて來るやうにと、要るだけのお金を持たせて、たうとう息子の望通りにその白鳥の谷に出してやつたのでございました。それは丁度今から二年前でございました。始めは何のたよりもございませんでしたが、近頃になりまして私は、すばらしい消息を受取つたのでございます。それはかういふ次第なのでございます。

まづ息子は家を出ますと、一年位谷にゐられるだけの食物を、仕事に必要な色々の道具を買備へまして、白鳥の谷に參つたのでございました。そこは話しにきいたよりも險しい絶壁と絶壁の間にある深い谷で、それに左右の山からは、丁度傘でもひろげたやうに、何千年と經つた古い木木が、枝をさし交して居りますので、眞夏でさへも殆ど谷の底には陽の光がとゞかないのださうでございます。息子は其處で根氣よく、埋れたダイアモンドを探しに、片はしから掘り返しにかゝりました。一月一月、それから半年一年と經つて、息子は谷底の大方を掘り返しましたが、まだ岩の破片や、腐つた木の根の外、何にも見つける事が出來ませんでした。さうして遂に二度目の秋を迎へた或晩でした。

息子はこれまでにしても何にも探し出す事が出來ないとは、自分の力がまだ足りないのか、それともこゝにはダイアモンドなぞ埋められてはないのかしらと、そんな事を考へ乍ら、しほ〳〵と歩きまわつて居りますと、息子はふと人の話聲を耳にしたのでございました。息子は始め、風が草をならして行く音かと思ひましたが、そのうち聲の主と

も思はれる。三四人の人影も見えますので、息子は思はず高く生ひ茂つた草の中に、身體を地に伏せて何者かと、そつとうかゞつて居りました。人の聲は息子の近くまで來ると、はたと止んで、何か重いものを地面に下したやうでございました。息子はぢつと耳をすませて居りますと、その中の一人が、急に大きな聲で泣き出したのでございます。すると他の三人も又、さも堪へられないやうに、それはそれは、悲しい聲をして泣くのでございました。四人は暫くさうして、長い大きな箱を中に置いて、嘆き悲しんで居りましたが、やがて傍の大きな楡の木の下を掘ると、その箱を埋めて、そのまゝ泣き乍ら歸つて行つたやうでありました。息子は草の中から身を起して、四人の行つて了つたのを見とゞけると、ひらりと飛び出して行つて、今埋めて行つた楡の木の下の箱を、掘り出しにかゝりました。息子はてつきり、これは盗賊が、ダイアモンドを埋めて行つたのに相違ないと思つたのでございました。けれどやうやく掘り出した箱の蓋を開けると、その中には、ダイアモンドどころかダイアモンドよりも美しい、輝くばかり綺麗な若いお姫樣

が、死んだ人のやうに、ぢつと身動きもしないで横はつてゐるのでございました。息子はあんまり思ひがけないことに吃驚致しましたが、どうしてもお姫樣が、死んだ人とは思はれませんので、抱き起して色々介抱致しますと、お姫樣はやうやく息をふき返しましたが、息子を見ると、あつと叫んで逃げ出すのでございます。息子は驚いて逃げ出すお姫樣の裾をとらへ、自分は決して怪しい者ではない事、そしてどうしてあなたはこんな所に埋められたのかと尋ねますと、お姫樣はやうやく安心したやうに、息子に色々と申されたのださうでございます。それによりますと此お姫樣は、この白鳥の谷を境にした向ふの、白鳥の國の王女、白鳥姫と申される方なのでございますが、その白鳥の國では三年目毎に、誰が何處から持つて來るのか、不氣味な字で、十月十三日夜十二時までに、何歳になるお前の娘を、白鳥の谷の眞中の大きな楡の木の下に、箱に埋めておくやうにと書いた手紙が、束に蛇を刻んだ鋭い短刀で、その家の主の机に突きさゝるのださうでございます。ところがそれが三年目の今年、たつた一人しかお姫樣のない王樣の所へ行つたのでございました。此手紙を受取つた人は誰でも、その通りにしないと、それは〳〵恐ろしい祟があるのださうでございます。そしてそれはもうこれまで幾度となくあつた事なのでございますから、王樣はそこで泣く〳〵お姫樣を、白鳥の谷の楡の木の下に埋められたといふわけなの

でございます。息子は此話をきゝますと一方ならず立腹致しまして、お姫樣を木の下に埋めさせた以上は、きつとそれを掘りに來る者がなくてはならぬといふのでこわがるお姫樣をはげまして、その楡の木の下の周りに深い穽を掘つて、二人は草の間にかくれて、誰かが穽にかゝるのを待つて居りました。すると眞夜中近く靜かに歩いて來る大勢の人の足音が聞えましたそして「埋れたダイアモンド、埋れたダイアモンド」と笑ひながら云ふ聲が、あちらこちらから起つたと思ふ間に、間もなくそれらは大きな叫聲をあげて、穽の中にまつさかさまに落ちこんで了ひました。それを見た息子とお姫樣とは、得たりかしこしと這ひ上つて一生懸命草にしがみついてゐる、變な男をのけた外、永久に土の上に出られないやうにと、上から土をかぶせて了ひました。

息子は翌朝谷を出ると、蒼い鬼の面を冠つて、可笑しな黑い着物を着てゐる昨夜の男をつれて、白鳥姫と一緒に、白鳥の國の王樣の所へ參りました。さうして白鳥姫を王樣にお返しして再び鬼の面の男の案内で、息子は澤山の兵隊を王樣から拜借し、白鳥の谷をずつと北へ行つたある巖窟の中から澤山の捕はれた女の人を救ひ出して參りました。

何と皆樣、まるでおはなしのやうではございませんか。けれどこれからがもつと大變なのでございます。——さうして息子が凱旋して白鳥の國へ歸りますと、王樣のお喜は一方でなく、遂に白鳥姫を頂いて、それから宮中で暮すやうになつたのでございます。そこで私は白鳥の國の王樣の御親類といふ格で、息子の迎へを待つて居りますのでございます。」

王樣はこの老人の話も大層珍らしくお思になつて、御婆美に立派な着物を、一重ねお遣しになりました。

その日はそれで暮れました。王樣は又明日をお約束なつて、御氣嫌よく御自分の御室へお歸になりました。

五

王樣はそれから毎日の樣に、朝から晩までお話をきいて暮してゐらつしやいました。けれどたうとう王樣は、この馬鹿々々しく退屈な事に氣がお付になりました。

そして仰有いました。

「私は何といふ馬鹿なんだらう、他人の成功した話なんか夢中になつてきいてどうするのだ。つまらない事だ。此上なくつまらない事だ。」

王樣はそれからすつかりお話をきくのをおやめになりました。そして自分に神樣がわりあてゝ下すつたお仕事にせいをだす、働きものゝ、いゝ王樣におなりになりました。

（をはり）

諸國傳說童話

藤澤衞彦

夜盜蟲

夜盜蟲といふ蟲は、心のねぢけた、よくない蟲で、よる夜中、村の百姓達が苦心の農作物を、偉さうに『わあッ』と聲を立てゝ盜みに來ます。一匹二匹ならいゝけれど、たいがいなん千なん萬とも數知れず、一軍團を成し、『ごうッ』といふ凄じい羽音を響かして、農家の背戸となく、畑となく、あたり一面、眞っ黑けに寄せて來るので、何とも始末におへません。『あッ』と驚き恐れてゐる間に、菜、茄子、唐茄、西瓜でござれ、大根、胡瓜、大角豆でござれ、何の容赦もなく、食べ荒して、又『ごうッ』と勝鬨をあげて行つてしまひます。その家の人が朝起きて見ますと、ことに大切な薩摩芋が、露の盜きどころのない程、根も、葉も、喰ひ盡されてゐる事があります。

この夜盜蟲は、埼玉縣川越町から、その近郷近在にかけての名物なのですが、皆さんの大好きな薩摩芋も、此邊の物が一番おいしい譯は、自然に夜盜蟲の糞が、大變いゝ肥料になるからだといふ事です。それに、今では、此邊の誰も、この夜盜蟲を恐れません。といふのは、夜盜蟲の害を防ぐに不思議なきき目のあるおまじなひがあるからです。夜遲く、『ごうッ』と、凄じい夜盜蟲の寄せて來る羽音を耳にしますと、忽ち、其邊のお百姓は、やなら、眠さうな目を、こすり〻こすり起きあがつて、『どれ、一つ又、おどかしてやるべえ。』と、戸を開けて、表に出で、『辨千代、辨千代、辨千代。』と、三度聲を掛けます。すると、攻めよせて來た夜盜蟲の大軍は、忽ちに群を亂して、どこともなしに逃げて行つてしまふのです。

此邊の夜盜蟲は、昔昔、川越の夜役で討たれた上杉勢の怨靈から出來た蟲であるので、未だに、其戰爭で勇ましい功績を樹てた少年の名を恐れて逃げるのだといふ事です。

その少年こそ、時の河越城主、鴉烏左衞門大夫綱成の末の、弟、辨千代であつたとのことです。（武藏の話）

魔の水車

德島縣名西郡川原村大字高川原に、城といふ小字名のところがございます。此地の西の方には、小川が流れてゐり、その岸には、ただ一面に、蘆の生ひ茂つた處がございますが、昔から、こゝには、何時でも、水車がかゝつてゐました。不思議な事には、毎夜毎夜、十二時頃に、その水車を踏む者があつて、そつと米などを置いて行くと、その怪體のわからない魔物が、默つて搗いておいてくれたといふ事です。村の者は、どうかして、其搗手の誰であるかを知りたいと思つて、隨分、水車の邊に近よつた者もありましたが、たいがいは、恐ろしくなつて歸つて來ました。で、搗手は、美しい女の人だとも、綺麗な小人だとも噂されましたが、まつたくは、まだほんとに見た者が無かつたのでした。或時、おれこそ見屆けてみせるといふ若者があつて、その水車場に覗ひ寄りましたところ、幸に氣がつかれずに近づく事が出來ました。見ると、怪しい影は、いつものやうに、水車をふんでゐるやうです。『よし、よし、一つ驚かしてやれ。』と、其若者が、急に、『おい、其處にゐるのは誰だい。』と、聲を掛けました。すると、直に、『はい私です。』といふ素敵もない大きい聲。それは、村中の夜を驚かすやうな大きな聲で返事する者がありましたが、どうした事か、その怪しい者に近寄つて行つた若者が歸つて來なかつたので、未だに、魔の水車の主は、何者とも知れずにゐるといふことございまです。（阿波の話）

八幡烏

かあかあ烏、烏が鳴いて行く、八幡の森

（神宮寺の屋根へ鳴いて行く鳴いて行く。

信濃國中の烏は、年に一遍、更級郡八幡村の八幡宮の御社さして集つて來ます。何處に棲んでゐやうが、其日、千曲川の瀨の水に身を濯めて、參詣に來るのださうで、その日には、うつさうとしたお宮の森の楢といふ楢千曲川の岸に臨んでゐる宮居の足場といふ足場、昔、此御社の別宮であつた神宮寺のお寺の屋根にまであふれて、第に一度のおまゐりをし、そして、過ぎた一年中の息災であつた事を御禮申し上げ、來るべき一年中の幸福であるやうお祈りをするといふことです。

此日、八幡樣は、それまでに惡い事をした烏に罰を與へなさるといふことで、村の人達は、よく八幡の森の大木の楢に、片羽または片足などを、つなげるが如くにふらりとかけて、一日も、二日もゐる烏見る事がありますが、これは、神のお怒りで、縛にかゝつてゐるのだといふことでございます。（信濃の話）

母さん里

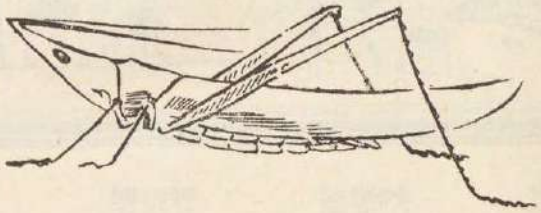
野口雨情

母さん里は
一本榎
親鳩　子鳩
並んで見てた
のつぼ　のつぼ　榎
天までとゞけ
母さん里へ
餅負つて往つた

童謡　はたおり（推薦）

都築益世

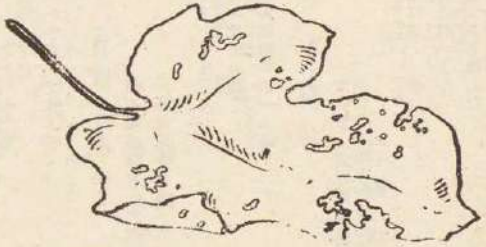
畑の　畑の
はたおりさん
お背戸で何反
はたおつた
鳴き　鳴き　機織る
はたおりさん
お留守居さびしい
はたおりさん



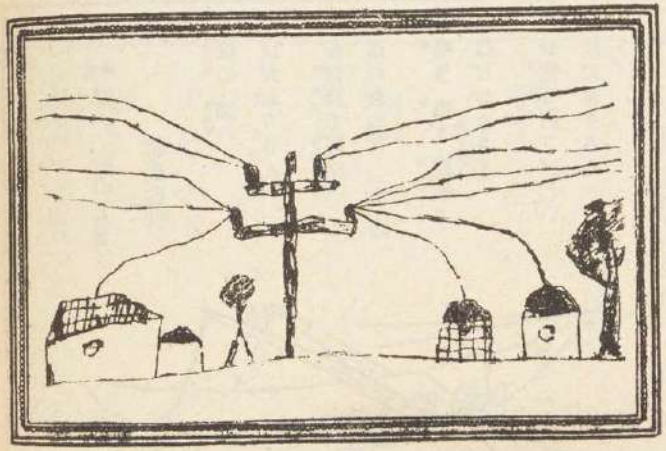
幼年詩　桐の木（推薦）

一瀬三郎

うちの前の垣に
桐の木が五本
大きいのが一本と
小さいのが四本と
風が吹くとばらばら
枯れた葉が落ちた



「カチノトコ」（賞）　山口縣柳井小學校尋二　村岡　信一



童謡　野口雨情選

猫と犬

東京市本郷區龍岡町三四　塚本篤雄

猫が犬　にらんでた
がんぎり眼でにらんでた
早く行つてけしかけろ

螢

新潟縣長岡市玉藏院町　奥津松次

螢の提燈　圓提燈
迷ひ兒さがして
歩いてた

三日月

大阪市東區船越町二　關口安一

三日月さんに聞いたれば
明日は風だ
大風だ

アムール河

西比利亞出征軍歩の二の二　矢口豐司

アムール河は逆浪たてた
日本の子供
パルチザンは憎いぞ

さぼてん

埼玉縣浦和町一六四　宮崎博

小さいさぼてん
王女様のお墓
蟻の王様のお一人娘

かもめ

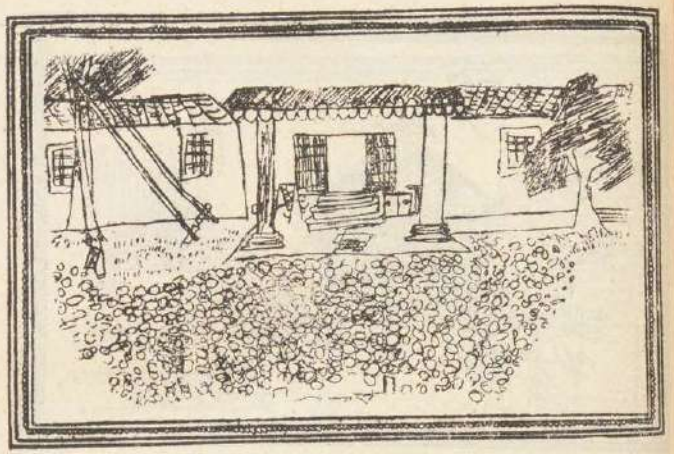
京都市上京相國寺東門前　三輪雅夫

鷗は涼し　鷗は涼し
海の海の上を
さつさと飛んだ

お寺

東京小石川上宮坂町一二二　土屋ゆきを

「エカチエン」（賞）　東京女子高師附屬尋一　中西　俊雄



雨降りお寺に燈がついた
和尚さん　木魚で
鐘たたけ

不思議

靜岡縣富士郡大宮町　池谷としを

私は不思議でたまらない
南瓜が　日向に
ころげてた

繪日傘

朝鮮京城遞信局通信課　千寵春郎

めくらの娘　あはれな娘
繪日傘さした
子守が見てた

鍛冶屋と桶屋

福岡縣黑崎町皇后崎　藤井松洋

鍛冶屋の小僧は馬鹿小僧
桶屋の小僧も馬鹿小僧
トンテン　カンテン
馬鹿小僧

蛙

神戸市山王町二の九六　藤野末男

がんぎり眼
雨降り蛙
雨　いつ降つた

月

群馬縣前橋市南曲輪町　保坂久春

丸い丸い　お月さん
雲からピツカリ　顔出した
兎も一緒に顔出した

小犬

仙臺市東八番町一四〇　鈴木幸四郎

あんまが一人でやつて來た
小犬がワン〳〵吠え出した
角まで吠え吠えついてつた

くだまき

高知縣土佐郡潮江村　川邊汀花

くだまきくだまきくだまいた
朝から晩までくだまいた
がら〳〵がら〳〵くだまいた

「おまつり」　東京市番町小學校尋二　岡島　正人

幼年詩

若山牧水選

ほたる（賞）
和歌山粉河小學校尋四　木村唯夫

一うつ　ぴかり
二あつ　ぴかり
びんの中の螢
ちよつとさはりや
千びきぴかり

評、まつさをな光が眼の前に動く樣ですね。（牧水）

はげ山
兵庫縣細川小學校尋六　服部傳治

はげ山　赤山赤い山
赤い土がなだれて
小さいうさぎがうづまつた

評、ほんたうに太陽を見上げて歌つてゐる調子がよく出てゐる、禿山の兎もされいな空想だ（牧水）

汽車
東京市谷小學校尋五　平樹俊郎

通る汽車
ゆえんも煙も
はかないで
毎日々々
行つたり來たり

評、面白い〳〵と見てゐる顏が見えるやうです。（牧水）

ふろやのふろ
朝鮮大邱第一小學校五　栗原剛

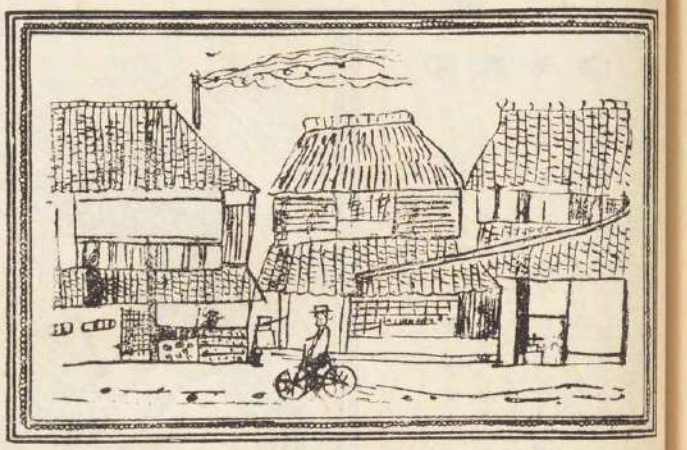
ふろやふろは　だいきらい
なんど行つてもゆのうへに
あかがたくさんういてゐる
あんまりきたないものだから
ちよつとばいてあーがつた

評、この率直な歌もよい。（牧水）

朝
大阪市南區御藏跡町四　稻垣ひろし

六時を打つた
電氣が消えた
朝日が昇る
ばうせきの笛がなる
煙が上る
雜水のとんねる

「內の近所」　行橋尋常小學校四年生　桑野　英文



評、外部の心の樣に眼の心持が嬉いてゐる。（牧水）

猫
靜岡縣安倍郡玉川　山田敏郎

お天氣のいい日
前の畑できりぎりす
ないてる
家の猫が一つ食べた
お天と樣がにらんだ

燒板塀
兵庫縣江川小學校高一　大內新治

塀塀
燒板塀
おてゝのよごれる
燒板塀
木槿の花が
のぞいてる

雲
大垣市俵町　小川桂一（十三歳）

高い〳〵伊吹山の
後の方から入道雲が

泥棒すーいちよ
東京府武藏野小學校五　川島利宏

泥きな〳〵顏をして
私の家を呑みにきた

秋の夜になく
すーいちよは
このめの上のなこ樣を
一ぴき引いては
すーいちよ
二ひき引いては
すーいちよ

からす
兵庫縣尼崎第三小學校尋六　柳千代子

からす〳〵何故黑い
紺屋にゐた時に
上からとんびに見つけられ
下から犬に吠えつかれ
あほてる拍子に眞黑の
あゐつぼの中へおちました
カア〳〵〳〵〳〵〳〵

「肖像」　栃木縣利足郡前山　寺内幸吾

けでした。

そのうちに足もたつやうになつたので、庭へだしてやると、親鳥のあとにばかりつきまはつて居ます。親鳥は土を足でかいて、ゐさをさがしてゐました。ぴよ〳〵といつて、おやどりのあとについて行くやうすは、ほんとに、かはいらしいものでした。

それからずん〳〵大きくなつて、もう卵を產むやうになりました。ゐをやると、くちばしをこつ〳〵いはしながらたべます。

それから、大正八年の十一月二十八日、お父さんがなくなられました。あとでお母さんは、とりが『くう〳〵くう〳〵』となく聲さへきくと、悲しくなるし、又とりのせわまでも、いそがしくて出來ないからとおつしやつて、とう〳〵賣つてしまふことになりました。私はかはいさうでなりませんでした。賣つてしまはなかつたらお母さんのかはりに、私がにはとりのせわからとりごやのおさうぢ、とりのことなら何でもしてやらうと、思ひましたが、もうしかたがありません。

綴方

（編輯部選）

にはとり（賞）

大阪天王寺師範附屬小學四　三谷ミツ

この家へおひつこししてから、半年ほどたつたある晩の事、ゆふはんがすんで、家内中のものが、皆集まつて、色々なお話をしてゐる中で、こんなお話をお父さんがいはれました。『こんどの家ははにはも前よりひろいし、裏もあるから、にはとりをかつてみたらどうだらう』と、いふ話でした。それからのちのある日、はつぴを着た人たちが、二三人で來ました。一人の人は、一匹のうすい、ちや色をしたにはとりをかついで來ました。そして、うちの中へはいると、はこの中へ卵を十ほど入れて、そこへにはとりを入れました。にはとりは、卵をいく日の間かぬくめて、とう〳〵ひよこが、うまれました。足もたちません。ただぢつとしてゐるだけでした。

そのうちに足もたつやうになつたので、庭へだしてやると、親鳥のあとにばかりつきまはつて居ます。親鳥は土を足でかいて、ゐさをさがしてゐました。ぴよ〳〵といつて、おやどりのあとについて行くやうすは、ほんとに、かはいらしいものでした。

それからずん〳〵大きくなつて、もう卵を產むやうになりました。ゐをやると、くちばしをこつ〳〵いはしながらたべます。

それから、大正八年の十一月二十八日、お父さんがなくなられました。あとでお母さんは、とりが『くう〳〵くう〳〵』となく聲さへきくと、悲しくなるし、又とりのせわまでも、いそがしくて出來ないからとおつしやつて、とう〳〵賣つてしまふことになりました。私はかはいさうでなりませんでした。賣つてしまはなかつたらお母さんのかはりに、私がにはとりのせわからとりごやのおさうぢ、とりのことなら何でもしてやらうと、思ひましたが、もうしかたがありません。

ある日、とう〳〵てつだひのをぢさんが來て、とりごやの中へはいつて行きました。私はそれをぢつと見てゐました。をぢさんは、『とう〳〵〳〵』と、にはとりをよびながら、つかまへます。にはとりは『こけつこつこここ、こけつくう〳〵〳〵〳〵』と、なきながら、ばた〳〵いはしてにげます。とう〳〵をぢさんは、皆つかまへてしまひました。そして、とりの足をなはでくくつて、ぶらさげて行つてしまひました。私はあとで、かはいさうにあんなにしられたら、つらいだらうなあと、思ひました。

猿

山梨縣橋上九一色小學校尋五　土橋郁子

永泰寺の庭に猿が來たと云ふので夕方弟と見に行きました。もう先に大勢行つてワイワイ云ひながら見てゐます。やつと人のすきまから見ると、二つの金網の籠があつて、右のには尾長猿が五匹、左のには普通の猿が五匹。みんな赤い顏をして珍しさうに見物人を眺めてゐます。もう大勢で色々の物をやつたと見えて、そこら一ぱい野菜なぞがちらかつて居ました。その中に一番前の子供が瓜のかけを投げてやると、小猿がチョコ〳〵かけて來てそれを拾ひました。すると後から來た大猿が、キヤツ〳〵とかみついてすぐとつて食べてしまひました。小猿は隅つこへ逃げてつて震へてゐます。又何かやつても皆大猿が食べてしまひます。ほんとににくい猿です。そして隅で震へてる小猿が可愛さうでなりません。そこでみんなで蛙をつかまへて來て大猿にやりました。大猿がつかむとすぐ手からピヨンピヨンはね出ます。大猿が大變あわてゝ追ひかけますが、中々ピヨン〳〵はねてつかめません。やつとつかまへても、又一寸油斷するとすぐはね出します。ほんとに可笑しくてみんな腹を抱へて大笑ひをしました。大猿はまだ一生懸命に追ひかけて、ほんとにもてあましてゐます。その間に小猿に瓜やお芋をどつさりやりました。弟は家へ歸つてから、猿と云ふものは大そう家の赤ちやんに似てゐますと云つたので大笑ひでした。

ルナパークで見た馬

福井縣高濱小學校高一　淺田鼎一

米國人が馬に『東京と書け』といふと、馬は首をふつて英語で書いた。

今度は算術である。又米國人が馬に『六錢持つて行つて三錢で御菓子を買へばいくら殘るか』といつた。馬は『3』といふ字をとつた。皆々大かつさい。

馬がピアノをひく。あゝで君が代や英米國歌などを頻にひいた。

又米人が『一週間は何日か』といへば『7』と書いた札をとる。『一月は何日』かといへば『30』をとる。『おまへの働く日は何日か』と問へば『0』をとる。主人の一週間に働く日は何日』といへば『8』をとる。馬が音樂もやれば、算術でも英語でも他の國旗でも何でも知つてゐる。

一番最後に『此の日本の國が他の國に取られる樣な事があつたら汝はどうするか』すると馬は早速大砲の處へ行き一發『ドン』と大砲をはなつて、日しやう旗をかゝげるといつて日本の國旗を高く〳〵かゝげた。

皆々大かつさい。

緒方君

東市府目黑小學校尋五　橋本五郎

緒方君は僕の一番好きなお友達です。僕はどうして緒方君が好きになつたのでせう。緒

方君は僕より二年後から、この學校へかはつて來たのです。僕は始め頃あまり言葉がなかしいので、からかつたりしましたが、ある時僕が運動場で遊んでゐたら、菊澤といふこんじやうの惡いやつが、僕に『テメへあまりなまいきすぎる』といつて、いきなり足をかけて、僕をたふしました。その時緒方君は小便して出て來た時でありましたから、そのやうすを見てすぐかけよつて、菊澤君のえりもとをもつて地べたへたふしました。そのすきに僕はおきましたが、どろだらけになつてもう自由がきゝません。そのまゝ木にもたれてそのありさまを見てゐました。そのうちに、菊澤君が『コンチクシヤウ橋本にかせいを取りやがつて』といつて、ぶん〳〵おこつたがもうどうすることも出來ません。緒方君のしたじきになつて、うん〳〵うなつてゐました。その時僕はむねがせい〳〵しました。緒方君は軍人の子でした。かういふことから、僕はその恩がありますので、忘れることはできません。君のお家はどこですか』と僕は緒方君に聞きました。

翌日、僕は、並木の住還を通り抜けて竹垣に朝顔のからまつた緒方君の家を訪れました。それから五にいつたり來たりするやうになりました。

火事ごつこ

兵庫縣細川第一小學校尋六　常森　操

學校からつ歸て、弟と僕とは豁さんとこへ遊びに行つた。すると豁さんはバケツを持つて來て『火事ごとしようか』と云ひながら梅の木の上でバケツをガンガンたゝいて居た。其處へ豁さんの從弟の義つしやんと、嘉さんとが大きい板をポンプだといつて『ポンプの火事やひのみの火事ぢや』とわけのわからぬ事を大聲でいつて來た。そこへひろさんのお祖母さんがこられて『こら何あほしよるんや』といつてしかつてゐられた。豁さんはそんならもつと小さい板でしようか』とその板に紐をつけて僕に『操やんはんしようたゝいてくれ…』といつた『よしそんならたゝいてやらう』『火事や火事や火事や』といつてたゝいてやつた。豁さんや嘉さんや義つしやんは『やあ火事や、やあ火事や』といつて、がヲガヲ板をひいてゐる。僕が『こつち、こつち』というてやると皆は一生懸命で僕の方へ走つて來た。豁さんが『火の見だ』といつて竹の先にきれの巻れをつけてゐた。そのきれに水をふくまして『消せ〳〵火事よ　早よう消え火事よ』といつてゐるといつかしらぬまに種さんが來て『おまへらなにあほしよのんで』といつて笑つた。

天神川原で

滋賀古保利小學校高二　木俣修二

少し寒くなつたので石の上で體をほして居た。そこへ昨日諸木戸でけんくわをした久田がやつて來た。久田は着物をぬぎ乍ら『修二、昨日はどういうた』といつてにらみつけた。僕はいそいで水の中へ入つた。久田は水の中へ入るとすぐに僕にかゝつて來た。僕は逃げまはつた。蛇籠の上へ上つたり水をもぐつたりしてゐたが、砂地へ上つて自分のむんべをかゝへて川原をどんどん逃げた。久田は着物をきて帶をくるくるまきながら追つかけてくる。僕もじんべを着ながら逃げた。天神橋から岡島のまがりへと出た。そこを右へ折れて大道の四辻へ來た。後を見るとまだ久田は來ない。僕は材木屋の木の間へかくれまつてゐた。しばらくして久田はやつて來て四つ辻をキヨロキヨロ見まはしてゐたが、變電所の方へ走つて行つた。僕は急いで家へ歸つた。

（通信）

繪日記、自由畫

山本　鼎

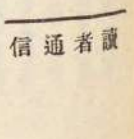
△繪日記のよいのは二つきりしかありませんでした。其二つ共たいさう面白く拜見しました。

△横澤幸子さんの日記。――善い着物を着てお祭へいつたり。細い頃から空へ大きなシヤボン玉を吹き出したり。徒足になつて草花に水をやつたり。髪の結びくらをしたり。氷を二杯もたべたり。おいもをたべたり。まゝ事のおつ母さんになつたり。お庭で音樂事をして、『ワレラノコノムアキキタレリ……』といふ『秋の景色』を歌つたり。お洗濯をしたり。本に片手をのせたまゝゲツ〳〵〳〵蓋寢をしたり。いてうがへしに結んで皆にネーヤのやうだとからかはれたり。お姫樣がルビー姫になつたり。賣物屋事が小間物屋になつて一圓と百圓のお札を受取つたり。手を繋つて歩る時頭の上におりて來た蝶にびつくりしたり。祖母樣の十三日にお墓參りをしたり。下駄屋へついてて日和下駄を買つたり。する、暢び〳〵と賑かなあなたの日記――いつもおさげ髪のあなたの姿が主人公になつて活動して居る實に面白あなたの日記を私は樂しく眺めたり讀むだりしましたよ。

△鈴木好子さんのも面白い。幸子さんとちがつて好子さんは、おもに見た物見た事を描きましたれ。姉さんのお友達の惠美子さんや、仲間の喜代子さん、海水服で居たり、お琴を彌いた居たりする姉さん。丸髷の伯母さん、朝寢して獨ぼつちで御飯をたべてる兄さん。百合花を持つて川を見て居る新村さん。横山さん、高橋さん、それから且那と昔ひ合をして居る氷屋のおかみさん、なぜが皆描かれちまつた。――三保の松原、お水神さんの花火の揚る夜景、圓十郎朝槇、加茂の白牛、なんかも描かれました。幸子さんのは、自叙傳。好子さんのは、見聞記。

そしてどつちも面白い。

△自由畫は今月は少い方でした。描いた人は分らないが。牛の上半身の寫生畫は、よく出來て居ました。横本五郎君の水彩畫もなかな



讀者通信

▼アンデルセン號を見て驚きました。こんなにきれいで面白いお話の出てゐる雜誌を讀んだのははじめてです。アンデルセンといふ人は偉い人だと思ひました。(千葉　山本君子)

▼「金の船」でアンデルセン號を出したのを機會に、この世界一の童話作者を記念するためアンデルセン會をつくつていろ〳〵の催をやつてはどうですか。(東京　中川生)

▼私の學校では父兄會のあるたび「金の船」に出てゐる童話を先生が讀んで聞かせて下さるので今ではだれもかれも「金の船」がすきになつてしまひました。(朝鮮　木内すが子)

▼今年の六月東京の親類から「金の船」を一册送つてくれましたのがもとでこんど私は誌友になりました。(栃木　四倉末雄)

▼九月號の「金の船」に出てゐる岡本先生の繪噺を見て姉さんも祖母さんも面白い〳〵と笑ひました。(大阪　福田鐵喜)

▼「金の船」童謡會へは誌友でなくとも出席が

かうまい。併しどつちも色彩豊ですから雑誌へのせるわけにゆかないのは残念です。

童謡の選後に

野口雨情

だん〳〵皆さんの童謡は、大變よくなつてまへりました。それでも皆さんのうちには事柄をうたつたり、言葉の調子を構はずに作つたりするかたがないではありません、皆さんのうちで、私の言ふ意味がよく解らなかつたならば、いつでもよいから「金の船」の編輯所へ私を訪ねて下さい、皆さんにちかに會つて、よく解るようにお話をしたいと思ひます。

本號推薦の『ぼたおり』は隨分よい童謡でありました。掲載の出來なかつたぶんでよかつたのは、佐藤勝熊、長谷川良夫、藤門逸風、粒樂白雨、長野桂子、山田邦臣、新井雨蛙、藤本統鳳、阿久澤登貴子、渡邊としじ、賤機民秀、橋本義太郎、三木胡桃、黒田秋哉、中村利雄、千輝春彦、武田多喜子、高橋十成、青柳花明、古野勝三、室勝、金山一信、小野唐平、山田幸雄、村田午郎、三宅さだつな、熊谷平八、大西貞雄、齋藤溪泉、大西淳三、山本準人、狩野錢太郎、鵜口天夢、上村ぱぷを、中西一夫、藤井ひでを、長野晶水、田中憲三さん達の諸篇であります。多やす子さんの「男の兒に、女の兒へ」は哀れの深いよい唄でしたが、長いためにだせませんでした。

綴方に就て

選者

今月は、すなほに書いた、いゝ作がありました。『にはとり』などは書いてある事がらがいゝ爲めもありませうが、鶏が賣られて行くあたりは本當によく書けてゐました。作者の感じた事が深いため、讀む者にも十分感動を與へるのです。綴體綴方は、物を深く感じるひとでなければよい作が出來ません。

『猿』もいゝ綴方でした。慾張りな大猿と、かはいそうな小猿がはつきり書けてゐました。『ルナパーク』で見た馬』は達者な作です。處々に「皆々大カツサイ」といふ言葉を入れたりして中々巧みです。しかし、高等一二年になると、大抵のひとは、器用な書き方をしらつて、書かうと思ふ事をすなほに書かないかたむきがあるやうです。それが爲めに本當のいゝ氣持ちが出ない事が多いやうですからこの事を深く注意して下さい。『橋本さんの『結方君』常森さんの『火事ごつこ』木俣さんの『天神川原で』など相當にいゝ作でした。

出來ますか。(東京　高倉善夫)△「金の船」の童謡を愛讀して下さる方なら、どなたでも歓迎へありません。(記者)

▼これから毎月皆さんの通信をのせることにしましたからどし〳〵送つて下さい。(記者)

▲綴方掲載外佳作　あかんべ(渡邊津子)約束(島田須美子)でん〳〵蟲(大田三千子)僕の好な雑誌(山野粹)夏の朝(猪下逸善)やけと(増田咲子)雷(伊藤作次郎)夕暮(松尾ナエ)月(岡見謹一郎)夜鷹(大井歌子)藥屋の門(榎本千代)水くみ(椋垣磯五郎)蛾(石橋岩蔵)四五日前の事(藤原勇次郎)墓參(魚瀬智慧)甲蟲(西田一郎)風(岸本松子)新聞屋(宮本三知男)月(岡見謹一郎)夜鷹(大井歌子)藥屋の門(榎本千代)水くみ(椋垣磯五郎)蛾(石橋岩蔵)四五日前の事(藤原勇次郎)墓參(魚瀬智慧)甲蟲(西田一郎)風(岸本松子)新聞屋(宮本三知男)殺された小犬(榎木喜美子)僕の犬(笹川加津馬)まひる(田中静子)海水浴(藤本二郎)思出(櫻井眞堅)キューピー(松下萬千代)この頃の景色(伊藤百合子)私の妹(川村きみ)家の書生(近藤榮子)弟(石埼さき)蛤堀(柴田勘蔵)あらそひ(山口正)墓參(竹本重花)夜明(宮下三郎)汽車から(松下春三)自然に開く口(高田勇)首とり(田中藤子)あくび(牧原龍逸)何の音だろう(水上友治)つゞき(水上友治)私だけ(寺西千代)雷(一ノ瀬キク)雨後(胡間六郎)夕立(希田榮)海(川口ハツ)夏夜(早野マス)雀(大野意一)

募集童話のこと

選者

今月集つた童話五十八篇の中から次の數篇の佳作を得ました。役人が鼻を失つた話(中西源三郎)袴(佐藤勝熊)二つの國(大和左止男)仲よしになつた理由(都築益世)カナリヤの死(熊澤みどり)小菊姫(石橋芳流)善吉と牛助爺(柳青葉)夢物語(藤本統鳳)涼風袋(柳青雨郎)ともだち(近江谷益代)鎭八郎さん(同上)エデンの花園(原田幸則)蟬取り(大西淳三)寛さんと正夫さん(花形青雲)空氣銃(佐藤勝熊)劍術のお弟子(島田國子)

さて厳選の結果、島田國子さんの「劍術のお弟子」を入選と定め十二月號に掲げる事にしました尙今後は毎月一篇づゝ必ず入選童話を定めて掲げる事となりましたから十分努力の作をお送り下さい。その月によい作のない時は前月の佳作中より選びます。

金の船消息

▲「金の船」十二月號　楠山正雄先生の『廣い廣い世界へ』長田秀雄先生の『鳥追船』小林愛雄先生の童話歌劇『王様とパン』藤澤衛彦先生の『諸國傳說お伽噺』前田林外先生の童話『菊畑』『窪田空穂先生沖野岩三郎先生西條八十先生がたの面白いお話のつゞきも、岡本歸一先生が幾日もかかつて苦心された澤山の繪畫も載ります。

▲「金の船」茨城縣童謡會　宮村逸男、樂谷錦秋兩氏主催の「金の船」茨城縣第一回童謡普及會が八月二十四日に茨城縣水海道町で開かれました。本社から野口雨情先生も出席されて近頃にない盛會でした。

▲「金の船」東京童謡會　毎月最終日曜日の午後一時から開かれる「金の船」童謡會へ出席希望方は當任幹事の四谷區舟町三番地都築益世氏方へ御照會下さい。發會式は九月二十六日(日曜)の午後一時から四谷舟町都築病院の三層樓上で開かれました。本誌からは岡本歸一先生、齋藤佐次郎先生、山本午後先生、野口雨情先生の順序で出席されました。記念撮影と出席諸君の芳名は次號に掲げます。

童謡音樂會に就て

「金の船」主催のもとに開催する豫定の童謡音樂會は出演者が止むを得ない旅行の爲め、延期になつてゐました。しかし、ちやく〳〵準備をしてなりましたから、別項中に書いてあります通り童話劇と共に開演致します。

▲物年齢掲載外佳作△お山(魚住藤二)△夏の夜(胡間六郎)△眼白(山西幸一)△蝶々(木村みどり)△蝉蟲(木俣修二)△蝋(平岡省平)

▼自由畫佳作　△岡島眞理△岡島正人△國村友三△山下千代△芙野芳江△内藤チヨ子△村岡秘雄△諸星錦壽△國弘アエ子△高橋清次郎△山本三津△川村きみ△柘植恒次△橋本五郎△岡松負二△鯉沼昌三△辻卯左子△本多秀子△竹内正彦△建田恭一△奥村陽太郎△中村昌子△安藤德雄△森岡留雄△石橋靖雄△高橋俊子△樫永峯子△櫻井澄子△榎本スミエ

▼「金の船」誌友(つゞき)　福井　田中健吉君△岡山　小橋幹子君△東京　宇野弘君△東京岡島眞理子君△東京　人見静子君△東京　塚本篤雄君△京都　桂千代子君△東京　大西貞雄君△京都　建田恭一君△北海道　佐藤錠二君△東京　水谷阿久理君△名古屋　宮崎ツルエ君△大坂　關口安一君△東京　坂田儀香君△東京　加藤辰五郎君△長野　竹村仁蔵君△岡島石井幸雄君△臺灣　並川定雄君△鹿兒島木原久子君△愛知　武内正彦君△金澤　前田一枝君△東京　明星教會日曜學校△東京　松下春三君△神奈川　加藤庄太郎君△佐賀　井井加代君)　(以下次號)

金の船の主催 童話劇公演と「金の船」童謡音樂會開催

本誌は、本年の二月十四、十五の兩日。丸の内有樂座に於て、世界的童話劇中の名劇メーテルリンク原作『青い鳥』を民衆座同人諸氏によりて公演し、滿都の少年少女諸君より熱狂的歡迎を受けましたが、更に、創刊一週年の記念として來る十一月中旬を期し、理想的訓練を經たる獨立劇場同人諸氏により「金の船」主催童話劇を公演することになりました。同時に、曩に豫告の「金の船」童謡音樂會も催し、童話童謡界の一大驚異たらんことを期します。

上演曲目、場所、日程並びに誌友諸君への特典は本誌次號を御覽下さい。

▼少年少女の創作募集

（原稿は東京府下田端三五一番地「金の船」編輯所へ送つて下さい）

自由畫 山本鼎先生選

自由畫は、お手本や雜誌の畫なんか見ずに、花なり、景色なり、動物なり、お母さんのお顔なり、なんでも好きなものを、かつてに描いて下さい。

幼年詩 若山牧水先生選

幼年詩は、山なり森なり花なり、何でも見たり感じたりしたことを、みなさんの好きなやうに詩にして下さい。

綴方 編輯部選

綴方は、みなさんが見たこと、思つたことを、そのまゝふだんつかつてゐる言葉で書いて下さい。

▼童話童謡募集

毎月童話童謡を募集いたします。題材は作者の自由ですが、内容も形式も、新しい眞の藏術的作品に限ります。童話は廿字詰百行内外、童謡は二十行以内。優秀作品は本欄に掲げ相當稿料を差上げます。童謡は野口雨情先生選、童話は編輯部でいたします。

▼「金の船」誌友募集

「金の船」の誌友を募集いたします。誌友規則は、編輯所宛にお申込み下されば、どなたにも、すぐお送りいたします。

「金の船」の合本

第壹輯（第一卷初號より第二卷四號まで六冊合本）定價壹圓五拾錢

第貳輯（第二卷五號より第二卷十號まで六冊合本）定價壹圓八拾五錢

金の船アンデルセン號 **世界名作童話集** 定價 參拾五錢

（部數に限りがありますから、賣切れぬ内にお申込み下さい）

定價一冊三十錢 送料壹錢
三ヶ月分三冊（送料共）九十錢
半年分六冊（送料共）壹圓八十錢
壹ヶ年分十二冊（送料共）三圓四十錢
振替口座東京參〇五七貳番

廣告料は御照會次第お答へいたします

（注意）

▽御註文は必ず前金で御拂込み下さいの送

▽送金は小爲替でも切手代用でも宜敷う御座います

▽切手代用は（壹錢切手）一割增に願ひます

▽御註文の場合は幾何卷第何號よりと云ふことをはつきり書いて下さい

▽住所姓名は丁寧に分りよくお書きください

東京府下田端三百五十一番地「金の船」編輯所

大正九年十月四日印刷納本（毎月一回）
大正九年十一月一日發行（一日發行）

編輯人 東京府下田端三百五十一番地 齋藤佐次郎
發行人 東京市麹町區飯田町六丁目二十五番地 横山壽篤
印刷人 東京市小石川區久堅町百八番地 大橋光吉
印刷所 東京市小石川區久堅町百八番地 株式會社博文館印刷所
發行所 東京市麹町區飯田町六丁目二十五番地 キンノツノ社

大正八年十月十六日　大正九年十月四日印刷　第　卷
（第三種郵便物認可）　大正九年十一月一日發行（毎月一回一日發行）

むし齒ほど恐いものはありません。むし齒から、いろいろな病氣が起ります。病氣がお厭なら

品質の一番良い

ライオン齒磨を

朝晩必ずお使ひなさいまし。

それが何よりでございます。

東京　キンノツノ社　發行

（定價參拾錢）